

小・中・高・大を連携し、すべての英語教育の"今"を知る。

小・中・高・大に情報を拡大
新創刊!

2016
春号
SPRING

英語情報

[特集] CAN-DOリストを活用した学習到達目標の設定と評価

鹿児島県 始良市立帖佐小学校 畑 康代 先生



北海道函館中部高等学校 大塚 徹 先生



長野県 木曾町立開田中学校 桐井 誠 教頭先生



明日から使える!
授業のテクニックを
動画で見られる!

AR

英語情報 『英語情報』専用アプリで
写真をかざすだけ!
※詳しくは表紙裏面で!

英検

公益財団法人 日本英語検定協会

早稲田大学 文学学術院 文化構想学部 安藤文人 教授

『英語情報』が生まれ変わりました!

現行の学習指導要領により、小・中・高等学校の英語教育が

「コミュニケーション」を軸として一本化したことを受け、

小・中・高の接続がこれまで以上に重視されてきています。

また、高大接続改革も進行しており、大学入試の改革に注目も集まっています。

そこで『英語情報』においても、各校種の先生方のお役に立つような情報をさらに充実させるため、

2016年度より、小学校の先生向けの情報紙『The Sensei Times』と統合し、

英語教育に携わる全ての皆様のために、

小・中・高・大をつなぐ総合情報誌として、新たなスタートを切りました。

さらなる拡充を図る『英語情報』にどうぞご期待ください。

新創刊した『英語情報』について

◎発行回数は年4回。

季刊誌となり、春号：4月発行、夏号：7月発行、秋号：10月発行、冬号：1月発行となります。

◎8ページ増の56ページに。

これまでの48ページから、56ページへ。授業改善に役立つ情報がさらに充実します。

◎英語教育に携わる皆様のための総合情報誌に

小学校教員向け情報誌『The Sensei Times』と統合し、小学校から大学までの

英語教育に関する情報をお届けします。

英語情報

英語情報 AR

『英語情報』専用アプリができました! (無料) (iOS/Android対応)

スマートフォン&タブレットアプリで **AR** マークのついた画像をかざすと、授業に役立つさまざまな動画を見ることができます。

今号の動画は、発行日より3カ月間(予定)ご覧いただけます。

STEP 1 アプリをダウンロード

スマートフォンかタブレットを用意して、AppStore / Google Playで『英語情報 AR』と検索し、ダウンロードします。

英語情報 AR 検索

STEP 2 画像をスキャン

「英語情報 AR」を起動し、**AR** マークのついた写真が枠内に収まるようにスキャンしてください。



STEP 3 動画を見る

「スキャン完了」と表示されると、動画が始まります。「スキャン完了」と表示された動画は「履歴」画面より動画を選択すれば誌面から離れても動画をご覧いただけます。

※ iPhone/iPad → iOS 7.0 以上、Android → ver. 4.0 以上。

※ Android版は一部対応していない端末がございます。インストール画面の動作確認端末をご確認ください。

※ カメラのピントが合わなかったり、光が反射したりすると、読み込みができない場合があります。

※ 読み込まない時は、カメラ位置を少し上下させて読み込み距離を調整してください。

※ 読み取りに時間がかかる場合はアプリを再起動し、再スキャンをしてください。

※ 動画の再生にはネットワーク環境が必要です。Wi-Fi、またはLTE環境を推奨しています。



02 最新情報

02 NEWS & TOPICS

04 授業改善

04 特集

CAN-DOリストを活用した学習到達目標の設定と評価

監修：東京外国語大学大学院 教授 投野 由紀夫

08 特集事例 CLASS REPORT

(高等学校編)

英語科全員で作成したCAN-DOリストを基盤に英語教育の方向性を明示

北海道函館中部高等学校 教諭 大塚 徹

(中学校編)

AR 小・中をつなぐCAN-DOリストを総目標として具体的な指導や評価に結び付ける

長野県 木曾町立開田中学校 教頭 桐井 誠

(小学校編)

AR CAN-DO形式のチャレンジカードにより子供たちのつまずきを把握し、指導に生かす

鹿児島県 始良市立粘佐小学校 教諭 畑 康代

14 (連載) YUKIの使える CLASSROOM ENGLISH

ハワイ東海インターナショナルカレッジ 准教授 大木 優喜子

AR 15 (連載) 安河内 哲也先生が聞く【第7回】明日から使える! 英語で授業 7つの鉄則

東京都立小平高等学校 教諭 冨永 治彦

20 (連載) 大学入試から変わる日本の英語教育【第1回】2020年の新テスト実施に向けて

上智大学 言語教育研究センター長 特別招聘教授 吉田 研作

22 (連載) 次期学習指導要領に向けて【第1回】言語活動の充実を図る取り組み

上智大学 外国語学部 教授 和泉 伸一

(中学校編)【第1回】

「授業は英語で行うことを基本とする」への取り組みなぜ英語を使うのでしょうか?

文教大学 国際学部・同大学大学院 国際学研究所 教授 阿野 幸一

(小学校編)【第1回】

小学校中学年で外国語活動や高学年の教科化に向けて今からすべきこと

琉球大学 教育学部 教授 大城 賢

28 大学入試改革

28 TEAP Hot News!

大学に必要な英語力を測るTEAPとは? TEAP 活用事例 第7回:早稲田大学

30 留学

30 留学が多様化する今、イギリス留学ならではの魅力とは? ~ブリティッシュ・カウンシルに聞く、グローバル時代のイギリス留学~

32 (連載) 海外進学【第3回】多彩な経験と気付きが国境を越える原動力に 大阪府立三国丘高校 校長 山口 智子

34 国際化の取り組み

34 Super Global High School【第7回】ふるさとの魅力発信を通じて国際舞台に羽ばたく人材を育成 新潟県立国際情報高等学校

36 Top Global University【第7回】教育と研究の向上を追い求めるその先に世界に通用する大学としての未来がある 広島大学 副学長(国際担当) 西谷 元

38 指導のヒント

38 (連載) 思考力・判断力・表現力を育むライティング活動のために【第1回】 清泉女子大学 文学部 英語英文学科 教授 大井 恭子

39 (連載) 柴原智幸先生のプレゼンテーション講座【第1回】 神戸外国語大学 外国語学部 英米語学科 専任講師 柴原 智幸

AR 40 (連載) MASUMI先生の夢中になれる英語 Game&Activity【第1回】 英語芸術学校 MARBLES 主宰 小口 真澄

42 Pick Up! 英語教育

42 グローバル人材育成を見据えて【第6回】わが町の英語教育事情 秋田県教育委員会 米田 進 教育長

46 (NEWS) 実用英語技能検定(英検)を2016年度第1回検定よりリニューアル!

48 全英連・惣田修一副会長(中学部会長)に聞く 変わる英語教育。中学校教員に求められる役割とは

50 SEMINAR REPORT 英語教育シンポジウム ~日本の英語教育が変わる時~を開催

52 教員研修

52 2015年度 英検 英語教員海外研修 帰国後の取り組み報告

●中学校英語教員研修 米国 モンタナ州立大学 大阪府 泉大津市立小津中学校 教諭 森田 有加里

●高等学校英語教員研修 英国 ケンブリッジ大学 千葉県立佐倉高等学校 教諭 尾竹 陽子

54 わたしのオススメ本

NEWS & TOPICS

英語学習指導などに役立つ最新情報をお届けします

NEWS

実用英語技能検定(英検)の問題冊子を 2015年度第3回検定より、 5つの言語に翻訳

昨今では、日本語を第一言語としない外国籍の児童・生徒が国内で増加傾向にあり、英検を受験する機会も増えています。こうした状況を受け、公益財団法人日本英語検定協会(英検協会)は、すべての受験者の実用英語技能を公平かつ公正に測定することを重視し、2015年度第3回検定より、英検の2級から5級の問題冊子の表紙および各問題の指示文を、5つの言語に翻訳しました。対象言語は、中国語、英語、韓国・朝鮮語、ポルトガル語、スペイン語です。

なお、ご利用に際しては、準会場受験の場合は、各団体責任者の管理・監督のもと、責任者がウェブサイト上から印刷した問題冊子の表紙および各問題の指示文を、試験当日に該当者に配布することが可能です。しかし、本会場受験の場合は、あらかじめウェブサイトで内容をご確認いただいたうえで試験に臨んでいただき、当日に英検協会から印刷物を配布することはいけません。また、受験者が印刷したものを持ち込むこともお控えください。

詳細については、以下をご確認ください。

■準会場 団体責任者
<http://www.eiken.or.jp/eiken/group/>

■本会場 個人申し込みの受験者
<http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/>

INFORMATION

すべての教員の皆様へ 「英検 検定料助成制度」 のご案内

英検協会は、文部科学省の『英語力向上のための5つの提言』に関する取り組みを全面的に支援し、全ての教員の方を対象に英検を教員特別検定料にて提供いたします。この機会にぜひ、英検を有効にご活用ください。

■助成の対象となる試験
実用英語技能検定(英検)

■対象となる級および教員特別検定料

級	教員特別検定料	定価
1級	4,000円	8,400円
準1級	3,000円	6,900円
2級	2,900円	5,800円
準2級	2,300円	4,500円
3級	1,600円	3,200円
4級	1,300円	2,600円
5級	1,300円	2,500円

■助成の対象となる方
学校教育法第1条に規定された学校のうち、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校に勤務する教員の方。

※海外校勤務の方はご利用いただけません。

お申し込み方法などの詳細は英検ウェブサイトをご確認ください。
<http://www.eiken.or.jp/eiken/group/teacher/>

募集

「英検」2016年度第1回検定受付中!

幅広い年代の方々が受験する実用英語技能検定(英検)。現在、第1回検定の申込受付中です。試験日程などの詳細は、英検ウェブサイトにてご確認ください。
<http://www.eiken.or.jp/eiken/schedule/>

<p>一次試験</p> <p>本会場(公開会場) 6月12日(日)</p> <p>準会場(団体受験のみ) 6月11日(土)・12日(日)…全ての団体・学校 6月10日(金)…中学・高校のみ選択可</p>	<p>二次試験</p> <p>7月10日(日)</p> <p>申込受付 3/18(金)~5/20(金) 協会必着 [5/18(水)書店締切]</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------

EVENT

留学の魅力学ぶ1日 九州海外留学フェア2016

英検協会は、九州地域における英語教育および国際交流の拠点である西南学院大学に各国大使館・公的機関の教育担当官を招き、「九州海外留学フェア2016」を開催いたします。

参加無料
入退場自由

日時:5月21日(土)10:30~16:00(予定)

会場:西南学院大学 西南クロスプラザ

(〒814-8511 福岡市早良区西新6-2-92)

対象:海外留学希望の中・高生、大学生、社会人

開催内容:

- ①国別・機関別相談ブース…参加団体の担当者と留学希望者の個別相談。なお、西南学院大学在学中の留学生および留学経験者もボランティアとしてブースに入り、体験談を話すなど相談のお手伝いをします。
- ②セミナー…国別・機関別に留学情報(または留学に関連する情報)を提供します。
- ③資料配布…参加団体・資料提供団体の資料配布・閲覧が可能です。

詳しくは特設サイトにてご確認ください。

※サイトは開催日間近にオープン予定。

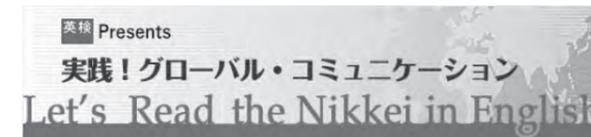
九州海外留学フェア

<http://kbunsha.com/kyushu/>



INFORMATION

ラジオで楽しく英語学習!



英検協会は、ラジオNIKKEI第1にて、毎週木曜22時30分~23時(再放送は毎週土曜17時30分~18時)に、学生から社会人まで、幅広い年齢層や英語力に応じたラジオ番組「英検Presents 実践!グローバル・コミュニケーションLet's Read the Nikkei in English」をオンエア中です。番組は、ラジオはもちろん、スマホ向けアプリ「radiko.jp」、ポッドキャストやオンデマンド配信で聴くことができます。

コーナー紹介

○今週のニュース

英語と経済を同時に学びます。『Nikkei Asian Review』(日本経済新聞社)の英字記事で、「時事英語」や「ビジネス英語」など、生きた英語をお伝えします。

○英語で授業!~Discussions in English~

英検の級別(準1級/2・準2級/3・4級)にハリソン先生と生徒2人が英語でディスカッションに挑戦します。取り扱うトピックは時事問題から身近な話題まで幅広く、さまざまなトピックに対して自分の意見を英語で発信する力を養います。本コーナーの英語のセリフとその日本語訳、ディスカッションの参考記事は番組のウェブサイトに掲載しています。

(過去のトピック例)

高齢化社会、温暖化対策、東京五輪、海外留学、SNSの使い方、デジタル教科書

詳しくは、ラジオNIKKEIウェブサイトにてご確認ください。

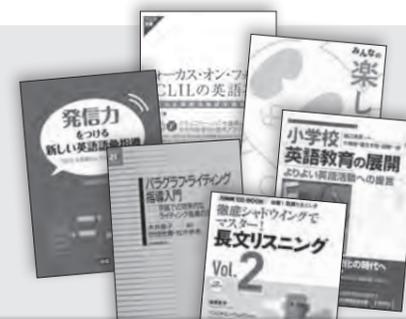
実践!グローバル・コミュニケーション

<http://www.radionikkei.jp/lr/>



英語教育関連書籍6冊を 各1名様にプレゼント!

特集の監修者および連載の執筆者の英語教育に関する著書6冊を、抽選で各1名様に差し上げます。本誌に関するアンケートにお答えいただき、ご希望の書籍番号をご明記のうえ、『英語情報』編集部までご応募ください。詳細はP.55をご参照ください。



2020年に実施される次期学習指導要領における目標や指導内容の改善、言語活動の高度化に伴い、CAN-DOリストの形での学習到達目標の設定やパフォーマンステストを活用した評価のあり方などが検討されている。

CAN-DOリストを作成する意義とは何か、学習到達目標の設定にCAN-DOリストをどのように活用すればよいのか。

さらに、今後はどのような評価が求められるのか。

東京外国語大学大学院の投野由紀夫教授とともに「CAN-DOリストを活用した学習到達目標の設定と評価」について考える。

特集「授業改善を考える」

CAN-DO

リストを活用した 学習到達目標の 設定と評価

●監修：投野由紀夫（とうの・ゆきお）

東京外国語大学大学院教授。言語学博士。専門はコーパス言語学、辞書学、第二言語習得。東京学芸大学大学院修士課程を修了後、東京都立航空高専講師、東京学芸大学講師を経て、渡英。2002年ランカスター大学大学院博士課程でコーパス言語学を修める。2007年より現職。



CAN-DOリストは なぜ必要なのか？

CAN-DOリストを作るようになった理由は2つある。

1つは、現在、文部科学省が進めている英語教育の改革によるもの。これまでも、学習指導要領の改訂に伴い、英語教育の指導法や授業改善が求められてきたが、実際には従来型の大学入試に対応するため、教科書も指導法も文法訳読、読解中心といったスタイルから大きく方向を転換することが難しかった。だが、グローバル人材の育成が急務とされ、そのためには本質的に英語教育を変えなければならないという気運も高まった。2020年に次期学習指導要領が実施されるにあたり、注目されたのがCAN-DOリストを活用した学習到達目標の設定である。児童・生徒が授業を通して語彙や文法を習得し、それを「ことばを使って、何ができるのか」という視点で目標を設定することで、指導のあり方を見直すというものだ。つまり、教員は設定した目標について児童・生徒ができるようになるために、教科書のどの題材を用いて、何をどのように教えればよいのか

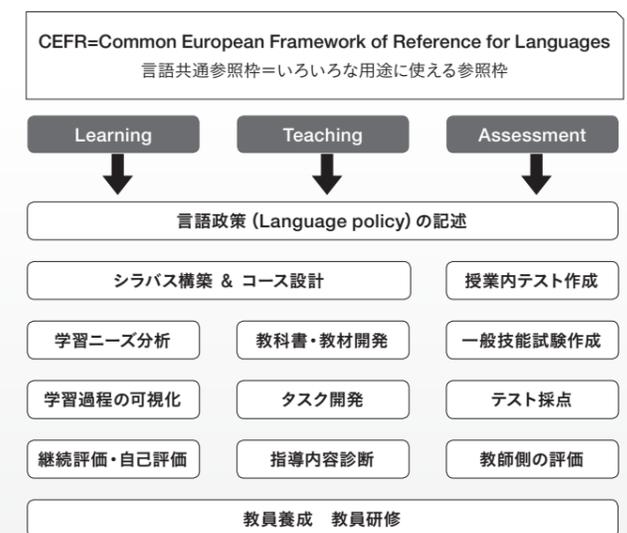
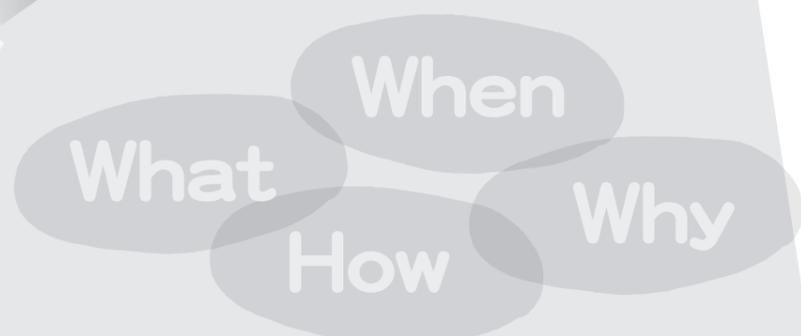
を考えることになる。

もう1つは、国際基準を指標とすることで、学習到達目標の設定がしやすくなること。現在、欧州評議会が定めたCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）といった枠組みを外国語能力の指標として、各国で活用する動きがある。特にEU圏内では、CEFRに基づいて外国語教育の政策を決定し、カリキュラムやシラバスの編成、評価までを行っている。また、スペイン語やポルトガル語といったヨーロッパ言語の影響がある南米においてもCEFRが活用されているという。それに倣い、日本においても、「国際基準に照らした場合に、どの程度までできているのか」ということが明確になれば、どのような力が不足している、どこを重点的に伸ばせばよいのかという見通しがつき、学習の目標を設定しやすくなる。CEFRはCAN-DOリストを作成する際の基盤となる。投野教授によれば、近年では国内においても、英語科教員のCEFRへの理解が深まってきたという。

CAN-DOリストとは何か？

CAN-DOリストとは、「言語を用いて何ができるか（CAN-DO）」という観点に基づいて、児童・生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を、4技能別に「～することができる」という形で設定し、リスト化したものだ。現在、文部科学省は外国語教育におけるさまざまな体制整備に取り組んでおり、そのうちの1つがCAN-DOリストの作成である。

2011年6月に文部科学省から公表された「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」において、学習指導要領に基づき、各中・高等学校が生徒に求める英語力を達成するための学習到達目標をCAN-DOリストの形で具体的に設定してその達成状況を把握すること、指導方法や評価方法の工夫や改善を図ることが示された。その後、2013年には「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」が公表され、各校でのCAN-DOリストの作成が進んでいる。

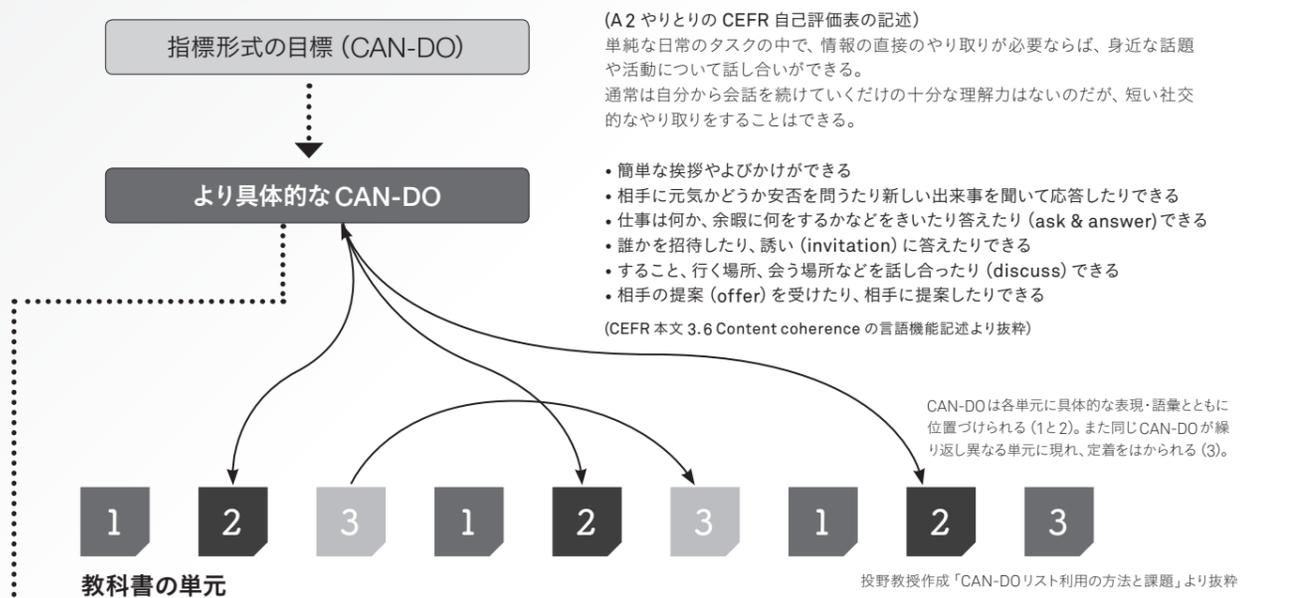


投野教授作成「CAN-DOリスト利用の方法と課題」より抜粋

CAN-DOリストをどのように作成すればよいのか？

「各校でCAN-DOリストを作成する際には、文部科学省が作っている手引きをはじめ、公益財団法人 日本英語検定協会など外部資格・試験団体が作成したCAN-DOリスト、CEFRを日本の英語教育に利用するために開発したCEFR-Jなどを参考にすると、リストの記述の仕方が分かりやすいでしょう」と投野教授。そして、「まずは、CAN-DOリストやCEFRに対する理解を深めたうえで、自分の学校の児童・生徒の実態に応じて、卒業時に『何ができるようになっていくか』という大きな枠組みから学習到達目標を設定します。その際にはCEFRが指標となり、自分の学校の児童・生徒の英語力はどのぐらいのレベルにあるのかを把握することができ

るでしょう。そのうえで、4技能別に何ができるようになるのかを具体化していくのです。そして、それを学年ごと、学期ごと、単元ごとの目標というように細分化した詳細なCAN-DOリストを別途作成するとよいでしょう。その細かいCAN-DOリストの中には、語彙や文法事項がそれぞれひもづくようになります。大きな目標から逆算して小さな目標を作っていくということは、CEFRの観点からも重要です。CAN-DOリストを作成することにより、近視眼的に“今日の授業だけをこなす”という授業を行うのではなく、児童・生徒の1年後や卒業後の英語力を見据えて指導計画を立てることができるといふメリットがあります」と説明した。



誰かを招待したり、誘いに答えたりできる

作成するうえでの留意点は？

CAN-DOリストには、次の3つの記述が必要とされる。

- ① Action (行動) : どのようなことができるのか
- ② Condition (条件) : どのような状況や場面で行うのか
- ③ Criteria (基準) : どの程度できればよいのか

そもそも言語を用いて「どんな行動ができるか」を示すのがCAN-DOリストであるため、作成にあたっては「学習活動」ではなく「言語活動」についての行動を明確に記述されなければならない。「例えば、『教科書に出てきた単語の意味がすべて言える』『教科書で学んだ文法についてすべて説明できる』ということ、言語活動とは言えません。また、外部テストのスコアや数値(語数やWPMなど)による指標を見たことがありますが、それも『行動』ではありません。これらはことばを使ってする『行動』を実現するための『条件』や『基準』であるべきで、目標はあく

CEFR-J	CAN-DO にひもづく表現の例	チャンク・パターン	RLD *関連資料
A1.2	Let's go to the cinema.	go to (PLACE)	CI-A2: suggestions; Let's ...
A1.2	Thank you. / No, thank you.	Phrase	T-series: AI
A1.2	Yes, please.	Phrase	T-series: AI
A2.2-CI	Would you like to come to my party?	come to (PLACE)	CI-A2: invitations; would you like to ...?
A2.2-CI	Do you fancy going to the club tonight?	fancy + Ving	CI-A2: invitations; do you fancy V-ing
A2.2-CI	Let's get some fish and chips.	get + (THINGS TO BUY)	CI-A2: shopping

投野教授作成「CAN-DOリスト利用の方法と課題」より抜粋

まで『言語を使った行動』でないといけません。文法については、その文法を用いて『どのような表現ができるのか』『どれだけ表現できるのか』というCriteria (規準) としての記述をすることになります

CAN-DOリストをいかに評価に活用するのか？

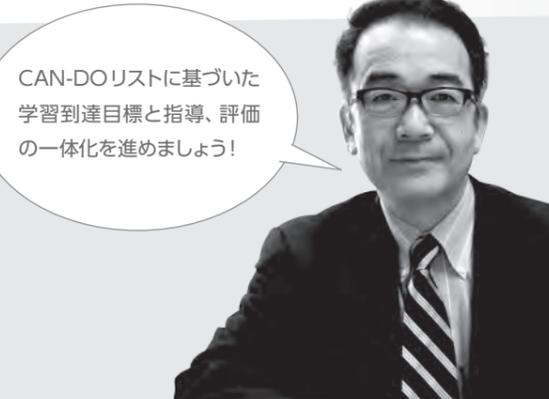
これまでの評価は、定期考査に高い比重が置かれ、そのうえで授業内の活動による観点別評価を加えるのが一般的であった。しかし、4技能を統合した言語活動が主体となる授業が行われるようになり、評価のあり方も変わってきた。定期考査に加え、パフォーマンステストによる評価も重視されるようになった。

「パフォーマンステストを行う際には、事前に児童・生徒にCAN-DOリストを示して、『何ができる』かを確かめるために、どのようなタスクを課すのかを考えます。そして、CAN-DOリストに基づいて、何がどれだけできているのかを評価します。知識を問うペーパーテストとは違い、パフォーマンステストで『できる』の度合いをどのように決めるのかという判断は難しいと思われるでしょうが、CAN-DOリストがあれば、どの単元でどの表現を学び、何ができるようになるかが具体的に示されているので、慣れてくれば評価もできるでしょう」

発信力を測るにはパフォーマンステスト(スピーキングテスト)だけが有効とは限らない。ライティングによって、表現力を見ることも可能だ。投野教授は「全てスピーキングテストで測ろうとすると、その時間をいかに確保するかという問題も生じます。日々の授業での言語活動で、表現することができているかを見ることもできますし、ペーパーテストでライティングの問題を出題して、表現力を測ることもできます」とアドバイスする。

生徒の学習意欲を高める「ポートフォリオ評価」とは？

各校で作成したCAN-DOリストを生徒にも共有することにより、児童・生徒は「この授業を受けると、自分は何かできるようになるのか」「そのためには何をどのように学べばよいのか」を意識するようになる。そして、「自分はどの技能のどの部分の力をつけていけばよいのか」を自覚させることで、学習意欲を高めることにつながっていく。「日本ではまだ浸透していませんが、ヨーロッパなどでは生徒が自身の学習の過程と成果を示し、教員による評価や外部試験による客観的な評価を加えた『ポートフォリオ評価』を作成することが一般的になっています。ポートフォリオ評価を作成することにより、児童・生徒は学びの過程や現状の英語力が明確になり、目標を設定しやすくなります。さらに目標を達成するためにどのような力を付けたらよいのかが分かり、より高いレベルを目指すようになるでしょう」



CAN-DOリストに基づいた学習到達目標と指導、評価の一体化を進めましょう!

英語教育の変化に伴い、教員に求められることは？

現在は、各校独自のCAN-DOリストを作成し、その活用を進めている段階だろう。だが、これから求められるのは、小・中・高等学校をつなぐ、一貫したCAN-DOリストである。そして、そのCAN-DOリストに基づいた指導と評価の一体化を進めなければならない。

「小学校と中学校の連携は現在さまざまな試みがされていますが、従来からあった中学校と高等学校の連携は難しいものです。高等学校はレベルの差が大きく、使用している教科書の難易度も違うため、中学校からどのようにつなぐのかが課題だと言えます」と投野教授は指摘する。そして「大学入試を意識して、生徒の実態に合わない難しい内容の教科書を使っている高等学校も多いようですが、教科書の難しい英語をそのまま教えるのではなく、

教員自身の言葉で易しい英語に言い換えて内容を再構成し、生徒とmeaningfulなやり取りをする指導が求められます。そのような指導力を持った教員を育てていくことが今後は必要だと思います。それにより、中・高の連携もスムーズになるでしょう。また、4技能全てを同じレベルで教えるのではなく、生徒の実態を把握し、技能のレベルに応じた適切な指導をしていくことも大切です。そして、生徒が言いたいことを引き出したり、言い換えたりといった表現力も身に付けなければなりません。英語で授業を行う、ということは、教員自身の英語力を高めることにもつながります。教員の指導力向上のための研修が現在も各地で開かれていますが、今後もさらに研修の重要度は増すでしょう」と締めくくった。

CLASS REPORT

学校訪問 高等学校編

北海道函館中部高等学校
大塚 徹 先生

英語科全員で作成したCAN-DOリストを 基盤に英語教育の方向性を明示

創立120周年の歴史と伝統を誇る北海道函館中部高等学校。文部科学省等のさまざまな研究指定を受け、2015年度ELEC英語教育賞の「文部科学大臣賞」を受賞した同校では、英語科9名の先生方が全員で協力しながら、3年前にCAN-DOリストを作り上げ、学習到達目標と指導、評価の一体化を実現している。大塚徹先生が指導する1年生の「コミュニケーション英語I」の授業を訪ねた。

考え、使うプロセスを大切にした指導

同校では英語を「生徒各自の視野や可能性を広げるコミュニケーションツール」として、「実際に英語でコミュニケーションができる技能」を身に付けることを授業の目標とする。英語科教員9名で意見を出し合い、3年前に作り上げたCAN-DOリストで設定した卒業時の学習到達目標は「英語圏への留学にも、ほぼ対応できる英語力(英検2級相当以上)を身に付けること」だ。そして、目標を達成するために、入学当初の導入を大切にしている。英語科主任の白鳥宏之先生によると、入学当初はあえて、「コミュニケーション英語基礎」からスタートし、6月頃までは「英語で行う授業」になじめるように配慮するという。その後は、「コミュニケーション英語I」を履修し、生徒が自分の言葉で気持ちや考えを表現する力を高めていく。単なる暗記や反復作業では養うことのできない「考える」「使う」というプロセスを大切に授業を通じて、生徒が間違いを恐れずに英語を使い、自主的に学ぶ環境を整えている。

授業では初見の英文を読み、分からない単語や文法があっても辞書で調べず、文脈から意味を類推して読み進める。教科書の予習を禁じ、和訳は渡していない。白鳥先生は「Readingの活動では初見の英文への対応力と類推力、速読力を高めています。本校では英語の即興力を重視しており、読んで理解した内容を、自分の言葉で表現し、理由をつけて考えを述べる力をつけていきたいのです」と語った。

CAN-DOリストは活用しながら改訂していくことが大切

CAN-DOリストを作成してから3年が経ち、活用しながら改善点も見えてきた。そこで現在、改訂作業を進めているという。「英語科教員全員で意見を出し合いながら作り上げていくプロセスが大切」と感じている大塚先生。CAN-DOリストを作成するメリットについて「本校の英語教育が目指す方向性、生徒に身に付けさせたい英語力が明確になります。そして、学年による目標のばらつきもなくなり、3年間を見通した指導を考えられるようになりました」と話す。白鳥先生は「一度作ったら終わりではなく、活用しながら内容を見直し、改訂していくことが必要です。現状はCAN-DOリストによる学習到達目標の設定という大きな枠組みですが、これを学期ごと、単元ごとの授業に当てはめられるよう具体的な目標に落とし込み、リストに記した内容とどの単元が結び付くかを明確になるようにしていくことを考えています」と述べた。



技能別のCAN-DO記述を話し合いながら絞った



生徒が自分の言葉で表現できる力をつけたいと語る英語科主任の白鳥宏之先生



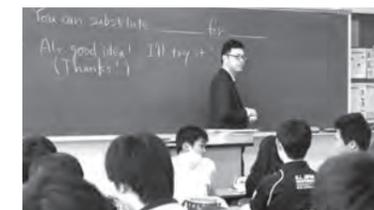
教員同士で意見を出し合いながらCAN-DOリストを作成する過程が大事だと考える大塚徹先生

授業の流れ

1 語彙指導 (Speaking)

市販の単語集の指定ページより10個程度の単語を学習。単語と意味をただ読んで覚えるだけではなく、例文を用いて単語や構文の使い方を覚える。大塚先生はSubstituteという単語について、黒板にA: You can substitute some _____ for _____ / B: Ah, good idea! I'll try it! と例

文を書き、生徒たちに隣同士でペアを組み、交代で会話をするように促した。生徒たちは空欄に入る言葉を、自分なりに考えて発する。役を交代して会話をした後、クラス全体での発表となった。電子辞書は紙の辞書の代わりになる、ココナッツオイルはオリブオイルの代わりになる…などと、生徒



※ARではありません

の個性が答えに表れ、教室は生徒たちの活気に満ちた。

2 導入 (Speaking)

この日の授業の題材は「世界の4つの珍しいホテル」だった。すぐにメインの活動には入らず、まず生徒の興味を引き出すため、生徒にとって身近な話題に置き換えて、ペアワークをする。黒板にはA: What do you think is a typical (normal/usual) hotel for you? / B: It has ... / There are

…という会話文が書き出された。大塚先生は少なくとも3つの例を挙げるよう指示し、生徒たちは自分の経験に基づいて、ホテルの部屋や設備などを思い浮かべながら、会話を繰り返していた。ペアワークの後には全体発表となり、テレビ、温泉、ベッド…などと、生徒たちは積極的に次々と発



※ARではありません

表していった。

3 グループワーク 1 (Reading & Speaking)

続いて、4人ずつのグループに分かれて座るように指示が出される。大塚先生から(1) The Green Magic Tree House (2) The Ice Hotel (3) Jules Underwater Lodge (4) Taprobane Island の4つの珍しいホテルの写真が配られ、座っている席によって、一人ずつ順番にホテルが割り

振られた。すると、同じホテルを担当する生徒同士で集まって、そのホテルにはどのような特長があるのか、本文を読んで理解を深めるようにと指示が出た。担当するホテルごとに決められた席へ移動し、生徒たちはペアを組み、2分間の制限時間で本文に目を通し、写真を見せながら自分



※ARではありません

が理解した内容を相手に伝える活動に取り組んだ。

4 グループワーク 2 (Speaking)

自分の席へ戻り、グループのメンバーに向けて、自分が担当するホテルについて、自分の言葉で説明をする。説明を聞いたメンバーは、自分が知りたいことを質問し、それに対して、さらに説明をするなどして、生徒同士で学びを深めていく。時

には言葉に詰まってしまう、説明が止まってしまう生徒もいる。すると他のメンバーが言葉を添えて、説明役の生徒の言葉を引き出していた。生徒たちには、お互いを助け合い学び合う姿勢が身に付いているのが見て取れる。



※ARではありません

5 全体発表 (Speaking)

当初、大塚先生が立てた授業計画では、本文を黙読し、内容理解を深める活動が組み入れられていたが、生徒たちの言語活動の盛り上がりを見て、急遽、その活動は取りやめ、グループワークの時間を長めに取った。目の前の生徒の様子をしっかり見てからこそできる臨機応変な

判断だった。その後、大塚先生は生徒たちに向けて質問する。「If you could stay at only one hotel, what hotel would you choose, and why?」生徒が「いつか、美人モデルと恋人になり、(4)のホテルに泊まりたい」と答えると、生徒たちからどっと笑いが起きた。最後に自分ならど



※ARではありません

のホテルに泊まりたいのかを挙手させて人数を確認し、授業を終えた。

CLASS REPORT

学校訪問 中学校編

長野県 木曾町立開田中学校
教頭 桐井 誠 先生

小・中をつなぐ CAN-DO リストを総目標として 具体的な指導や評価に結び付ける

長野県の開田高原に学舎を構え、御嶽山を間近に仰ぐ木曾町立開田中学校。全校生徒わずか33名という小さな学校だ。県教育委員会の指導主事経験を持ち、同校のCAN-DOリストを作成した教頭の桐井誠先生は、近隣の小・中・高等学校でCAN-DOリストを活用した学習到達目標の設定について研修とモデル授業を行っている。2年生の授業を訪ね、ALTのランス・ストロサル先生とのティームティーチングの様子取材した。

生徒の学びの姿をイメージできる CAN-DO リスト

桐井教頭は授業冒頭で、単元のゴールとその日のゴールをまず生徒に示した。ゴールが明確になると、生徒たちも何を学ぶのか、活動の目的が明確になるからだ。授業は基本的に英語を使って先生が指示を出す、説明が必要であったり、生徒の理解が不十分と感じたりした場合には、日本語でも説明を添える。



指導主事経験を生かして指導にあたる桐井教頭

同校のCAN-DOリストは、作成してからようやく1年が経つ。まだ「試作」と添えているのは、桐井教頭が「授業で活用しながらより良い内容へ改訂していきたい」と考えているからだ。CAN-DOリストには小・中連携も踏まえ、小学5年から中学3年までの学年ごとに、4つの技能別の「CAN-DO」が記されている。「条件や数値を



桐井教頭が2015年度に作成したCAN-DOリスト(試作)を、新採用の教科書に合わせて改訂中

入れてしまうと、評価規準を示すことになってしまい、生徒の学びの姿が見えなくなってしまうから」と、桐井教頭は条件や数値を能力記述文に入れていない。2016年度は新しい教科書の採用が決まっており、2015年度版の試作をベースに、新たなCAN-DOリストを作る予定だ。

CAN-DO リストに基づいた評価を行う

この日の授業はSpeakingとWritingのCAN-DOが学習活動につながった。桐井教頭は「授業では読んで書く、話して書く、といった複数の技能を統合した活動を行うため、CAN-DOリストのReadingにはCross Skill(統合型)の項目も設けています」と説明した。

CAN-DOリストは評価にどのように結び付けているのか。桐井教頭によれば、1年生の定期考査におけるリスニングテストの割合が高いという。定期考査では和訳問題は出さず、聴いた内容をおおまかに捉え、設問に答えたり、要約を書いたりする形式としている。学年が上がるにつれて、リスニングの割合は減らし、定期考査では読んで書く、パフォーマンステストでは読んで話す、話して書くといった「技能を統合した評価」を行う。それぞれ、CAN-DOリストに示された「~できる」にしたがって、「どの程度できているのか」について評価する。

「2016年度のCAN-DOリストを作成する際には、各単元をそれぞれの技能に振り分けていくことも検討しています」と桐井教頭。新しい年間指導計画には、試作の枠組みを生かしながらも、教科書の単元の評価規準を埋め込む予定だという。



ALTのランス先生は生徒たちに人気。18年の指導経験を持つベテランだ

授業の流れ

1 導入

2年生は10名が在籍する。この日は2名が欠席して8名という小さな人数での授業となった。黒板にはLesson Goalとして「Lesson 8 Indiaを参考に、京都・奈良を紹介しよう」と貼り出されていた。授業が始まると、ALTのランス先生が、生徒たちに日付や曜日、天気などを尋ねる。スプリングを確認しながら発音し、英語

を聴き、話すことに慣れさせる。その後、ランス先生や桐井教頭が京都や奈良に関する「私は何でしょうクイズ」を出題。京都や奈良の有名な寺社などについて、ヒントとなるような「自己紹介」を行う。それを聴いた生徒たちは、「東大寺」「奈良の大仏」などと正解を元よく答えていった。



桐井先生の授業の様子はこちら

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

2 Q&A で会話を広げる

続いて、桐井教頭が「自分のおすすめの場所について、英語でどこまで伝えられるか挑戦しよう」というToday's Goalを貼り出した。2年生は2カ月後に控えている京都・奈良への修学旅行の事前学習を進めている。その内容を踏まえて、英語でも京都・奈良の魅力を伝えられるようになることを目指すという。生徒たちが修学旅行先の京都・奈良で外国人観光客と触れ合うことを想定した活動だ。

ワークシートには、京都や奈良に関する5つの質問が書かれている。まずはペアでQ&A活動をする。一人の生徒が質問を投げ掛け、もう一人の生徒は自分の

言葉で答える。生徒たちの活動の様子を桐井教頭やランス先生は巡視したのち、桐井教頭は「I think ...」と自分なりの表現をした生徒がいたことを紹介して褒めた。その後は、4人ずつ2つのグループに分け、各グループに桐井教頭とランス先生がそれぞれついて、先ほどのペアワーク同様に生徒と1対1のQ&A活動を行った。ランス先生や桐井教頭が観光客役となり、生徒たちはおすすめの場所を紹介する。生徒が一方向的に説明するだけでなく、説明を聞いた相手が疑問に思ったことを質問すると、それに対して即興で考え、答えることで会話を広げる練習となった。



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

3 Writing ~振り返り

この日の授業は、SpeakingからWritingへつなぐことを目指していた。一通りQ&A活動をしたところで、授業はまとめに入る。ワークシートの「Re-Construction」の箇所に、自分の言葉でおすすめの場所について文章で再言するのだ。Q&A活動で自分が相手に伝えた内容をベースに、生徒たちは文章を組み立てていく。桐井教頭は「どうしてもスプリングが分からないときは、そこで立ち止まらず、カタカナでもよいから書いておいて、次へ移っていくようにしよう」と呼び掛ける。また、Q&A活動をしているときに、どうしても説明がつかない生徒に、

別の生徒が「For example, ...」と言って例を示していたことを紹介し、生徒がそのような表現ができたことを褒めていた。最後は「振り返り」の時間。生徒各自が評価シートに今日の授業を振り返って「何ができたのか」を書き込んだのち、全体に発表し、評価内容を全員で共有した。指名された生徒たちは「恥ずかしかったけれど、話しているうちに自分の言葉で表現できるようになった」「条件を意識しながら話すことができた」と発言し、自然と「~ができる」というCAN-DOを生徒自身が理解して取り組んでいることが見て取れた。



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

CLASS REPORT

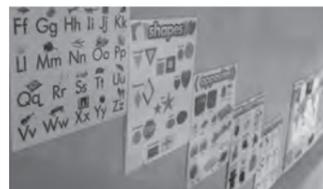
学校訪問 小学校編

鹿児島県 始良市立帖佐小学校
畑 康代 先生

CAN-DO形式のチャレンジカードにより 子供たちのつまづきを把握し、指導に生かす

1866年に設立された歴史の長い始良市立帖佐小学校。始良市は鹿児島県中央部に位置し、鹿児島市に隣接するベッドタウンだ。同校は国立教育政策研究所の教育課程研究指定校事業で、2015～2016年度の「外国語活動」の指定校に選ばれ、「相手意識を持ち、豊かにコミュニケーションを図る子供の育成を目指して」というテーマで研究・実践に取り組んでいる。畑康代先生が受け持つ5年1組の外国語活動の授業を取材した。

活動の流れを可視化して学習の見通しを持たせる



「英語の日常化」を図るため、校内の階段には英語の絵カードなどがたくさん掲示されている

帖佐小学校の子供たちは、外国語活動の時間を楽しみにしており、英語に慣れ親しみながら意欲的に活動している。授業以外の時間での「英語の日常化」を図るため、段階にアルファベットや国旗の絵カード、教科の名前などを掲示。子供たちが自然と英語を声に出しながら階段を往復する姿が見受けられる。

同校が目指す子供像とは「相手のことを考え、場面や目的に応じた英語などを駆使し、すすんでコミュニケーションを図ることができる」子供であり、他教科と連携しながら、知的好奇心を刺激し、コミュニケーションへの意欲を高めている。また、子供たちが慣れ親しんだ語や表現を、場面を変えて何度も使うことで、知識や技能を活用する。そのため、5年生で扱ったコミュニケーションの場面や言語材料について、6年生になってから再び同様の単元で扱うなど、単元同士の関連を明確にした。授業では子供に学習の見通しを持たせるため、導入を大切に、単元で扱う語や表現を使ったモデルス

5年: Hi, friends! 1 Lesson8 「夢の時間割」を作ろう 夢をかなえる(なりたい自分になる)ための夢の時間割を作り、紹介する。
6年: Hi, friends! 2 Lesson6 一日の生活を紹介しよう 夢をかなえる(なりたい自分になる)ための生活時間表を作り、紹介する。
6年: Hi, friends! 2 Lesson8 「夢宣言」をしよう 将来、就きたい職業やその理由、そのためにがんばりたいことなどを紹介する。

単元同士の関連を明確にし、慣れ親しんだ表現を何度も場面を変えて使うことで知識や技能を活用



研究主任の徳田先生は畑先生たちと協力しながら帖佐小ならではのCAN-DOリストを作成

評価項目を具体化したことで 単元のゴールを見据えた指導が可能に

同校の外国語活動の特色は、コミュニケーション活動の途中で「中間評価」を挟んでいることだ。中間評価では、手本となるようなコミュニケーションを図っている子供に発表させることで、他の子供たちに、より良いコミュニケーションの図り方への気付きを与えている。

さらに、子供に目標を持たせ、意欲の持続化と記憶の保持のために作成した、CAN-DO形式による「チャレンジカード」も特色の1つといえるだろう。子供たちはチャレンジカードに書かれたCAN-DOについて、休み時間などに友達同士で確認し合うほか、教師のもとを訪ねて、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」「やり取り」の5つの評価項目の内容に応じたチャレンジをしてスタンプを集める。教師は学年別の学習到達目標に基づいて作成された各単元の評価項目一覧と、チャレンジカードの評価項目における各技能の段階を共有している。その評価項目に基づき、子供たちのチャレンジに対して「どれだけできているか」を確認してスタンプを押す。畑康代先生は「チャレンジカードを導入したことで、教師は子供たちがどこでつまづいているかを把握し、指導に生かすことができるようになりました。また、評価項目を具体的な子供の姿で明確化したことによって、単元のゴールを見据えて指導することができるようになってきました」と話した。



チャレンジカードは子供たちの学習意欲を高め、つまづきを把握するのに役立っている

授業の流れ

1 導入

この日の授業は「夢に向けての時間割を作ろう」がテーマ。担任の畑先生とAEA(地域人材)の藤田幸絵先生がチームティーチングで授業を行う。前回の授業で、子供たちは好きな科目ばかりを並べた時間割を作り、「これではバランスが悪い」と子供たち自身で気付き、自分の将来の夢を実現するために、どんなことを

学ばなければならないかを再考した。授業冒頭では絵カードで示した教科の英語名を復習し、黒板に示した「What do you study on 曜日?」「I study 教科名.」「What do you like?」「I like 教科名(夢につながる好きなこと).」というフレーズをチャッツで何度も繰り返して覚えた。



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

畑先生の授業の様子はこちら

2 コミュニケーション活動と中間評価

続いて、ペアでのコミュニケーション活動に移る。子供たちは、将来の夢を実現するために作った時間割をもとに、チャッツで覚えたフレーズを使って会話する。単にフレーズのやり取りだけでなく、なぜ、自分がその教科を学ぶのか、理由を日本語で添えていた。しばらくペアワークを行った後は、中間評価を行った。モデルとなるコミュニケーションができていたペアが前に出て、実演する。その

やり取りを聞いたほかの子供たちは、実演したペアのどんな点が良かったのかを発表し合う。そして、どのようなコミュニケーションを取ればよいのかを友達の実演から理解した後は、再びコミュニケーション活動に戻る。今度は席を離れて動き回りながら、相手を見つけて会話をする。その際、畑先生は子供たちに向けて「はっきり」「ゆっくり」「笑顔で」のポイントに気を付けることと、なぜその時間割に



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

したのか、「夢に向かっての理由」を述べることも挑戦するよう、指示を出した。

3 振り返り

振り返りカードに各自が感想を書き込んでいく。「今日の授業を通じて、どんなことができるようになったのか」「どんなことに注意して活動したのか」「友達のどんなところが良かったのか」といった点について、1時間の授業を振り返る。カードは自分の言葉で書き記すとともに、「できた/できなかった」などを示す顔マークが添えてあり、自己評価をして顔マークに丸を付ける。書

き終わった後は、全体発表の時間だ。「自分の夢に向かって時間割を考えるのはとても難しかった」「はっきり、ゆっくり、笑顔で言え、友達の夢も好きな教科も聞きました。理由を聞いてみると、なるほどと思えるものでした」などと子供たちが発言すると、畑先生は、振り返りカードの中から「友達の発言に対して、言葉を返せるようになった」という子供の感想を紹介し、友



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

達と学び合うことの大切さを子供たちに伝えていた。

お知らせ

2016年11月15日(火)公開授業を行います。詳細は同校ホームページにてご確認ください。お問い合わせは帖佐小学校(Tel. 0995-65-2536)へ。

CLASSROOM ENGLISH!!!

この連載では、「毎日の授業で使える便利な表現」を紹介していきます。まずは、始業・復習・ディスカッション・宿題を出すという4つの場面から、解説を含めて2回にわたり紹介します。生徒の発話を促す表現から生徒に返す表現、授業を活性化させる表現まで…明日から使えるものばかりです！



大木 優喜子 (おおき・ゆきこ)
ハワイ東海インターナショナルカレッジ准教授。東京生まれ、アメリカ・カリフォルニア州ロサンゼルス育ちのサード・カルチャーキッド (Third Culture Kid)®。ハワイ州ハワイパンフィック大学にてTESOL (Teaching English as a Second Language) 英語教育修士号を首席で取得した。研究範囲は Flipped Classroom Model, Student Motivation in ESL Classrooms 等。
※母国で生まれるが幼児期や思春期を外国で過ごし、母国と外国の二つの文化を総合した三つ目の文化を自身のアイデンティティとして構築した人。

★ Beginning of class : 授業の開始時に使える表現

1. “What did you have for breakfast today?” / “What did you eat for lunch today?”
2. “Please ask your partner about his/her weekend.”
3. “Where did your partner go? Who did he/she go with? What did he/she do there? What did she/he eat?”
4. “So, Taro, can you tell me about your partner’s weekend?”
5. “Wow! Sounds like Miho had a great weekend! Thanks, Taro!”

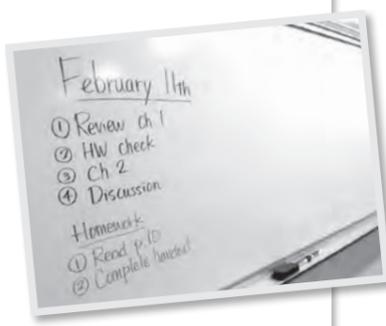
授業を始めるとき、まず出席を取りますね。午前中の授業なら“**What did you have for breakfast today?**”、午後の授業なら、“**What did you eat for lunch today?**”と聞いてみるのもよいでしょう。生徒がなかなか発話できなければ、“Did you sleep well last night?”などのYes/Noで答えられる簡単な質問をして促してみましょう。

このような問いかけは、二人一組のペアをつかって生徒同士で聞き合ってもよいでしょう。“**Please ask your partner about his/her weekend.**” “**Where did your partner go? Who did he/**

she go with? What did he/she do there? What did he/she eat?”などと、質問の例をあげます。そして数分後、生徒一人一人にパートナーがどのような週末を過ごしたのかを報告してもらいます。例えば、“**So, Taro, can you tell me about your partner’s weekend?**”と尋ねます。するとタロウは“Miho went to Tokyo Disneyland on Saturday with her friend. She rode Splash Mountain.”のように報告します。報告が終わったら、“**Wow! Sounds like Miho had a great weekend! Thanks, Taro!**”と褒めてあげましょう。

★ Review : 前回の授業内容を復習するときに使える表現

1. “Let’s review what we did last time.”
2. “What did we talk about last time?”
3. “Did we talk about food? Fashion?”
4. “Yes, we talked about sports. What sport did we talk about?”
5. “Did we talk about soccer? Did we talk about golf?”
6. “In the textbook, what was John watching with Taka on T.V.?”
7. “Good job! You remember very well.”



前回の授業の復習をするときには“**Let’s review what we did last time.**”と言って、まず生徒の注目を集めます。生徒に向かって“**What did we talk about last time?**”と尋ね、生徒の反応を見ながら、“**Did we talk about food? Fashion?**”などと、Yes/Noで答えられる簡単な質問をしてみましょう。そして、“**Yes, we talked about sports.**”と返します。さらに、“**What sport did we**

talk about?” “**In the textbook, what was John watching with Taka on T.V.?**”といった、教科書本文に関する具体的な質問も織り交ぜ、前回の授業を復習します。重要な語彙などはホワイトボードに書き、正解が出るたびに“**Good job! You remember very well.**”と褒めることを忘れずに。

〈つづく〉

(連載)

安河内哲也先生が聞く

英語で授業



7

明日から
使える!

【第7回】

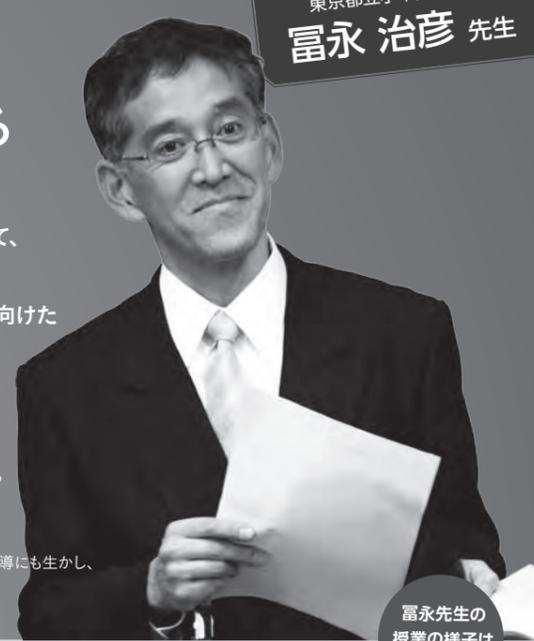
7つの鉄則

東京都立小平高等学校
富永 治彦 先生

教員同士のチームワークを大切に、 生徒が自律的に学習する姿勢を育てる

「自主・誠実・英知」を校訓とする東京都立小平高等学校。1962年の開校当初から、「将来国際社会で活躍する人を育てる」ことを目指して、英語教育や国際理解教育に重点を置いてきました。2015年度からは、東京都教育委員会による時代を担うグローバル人材育成に向けた学校の取り組みを支援する「東京グローバル10」に指定され、グローバル人材の育成をさらに推進しています。1年生が取り組む“Small Teacher Project”を指導する富永治彦先生の「7つの鉄則」を、栃倉和則校長、英語科の下山宣子先生と一緒にご紹介します。

富永治彦 (とみなが・はるひこ)
2012年に東京都立小平高等学校に着任。野球部監督も務め、野球で学んだ「コーチング」の技術を英語の指導にも生かし、生徒の声に耳を傾け、気付きを引き出し、発話を促す授業を実践している。2015年度は1年生を担当。



富永先生の
授業の様子は
こちら

本日の授業

「コミュニケーション英語」1年A組
『Cinderella』よりChapter9-10 グループ7による授業



1. 語彙指導



2. Q&Aによる内容理解



3. Act out でのプレゼンテーション



4. ビンゴタイム～講評

東京都立小平高等学校では1、2年生の3学期、普通科と外国語コースの全クラスで、生徒が教師となって英語で授業を進める“Small Teacher Project”に取り組んでいる。教材はペーパーバックを使用し、1年生は『Cinderella』(Disney Enterprises)を読む。4～5年前に始まった取り組みで、4人ずつのグループごとに割り当てられたチャプターについて、生徒が自作したワークシートを使って、語彙指導、Q&Aによる内容理解、プレゼンテーションを行う。プロジェクトに取り組むにあたり、初回の授業は富永先生がChapter1を題材に扱い、授業の進め方を実演指導する。生徒たちにはあらかじめ、グループの発表日とワークシートの原稿作成スケジュールが示され、どのようなワークシートを作って授業を進めるのかをグループで話

し合い、準備していく。発表内容はもちろん、準備や発表時、授業への参加の態度などを評価し、3学期の成績に加味する。この日は全10グループのうち、7番目のグループによるChapter9-10の授業だった。授業はワークシートを使った語彙指導からスタート。本文を読み進めるうえで重要な単語20個が抽出され、ワークシートには頭文字だけが記されている単語もある。授業を受ける生徒各自が単語をワークシートに書き込んだ後、教師役の生徒が1つずつ単語を読み上げ、答え合わせをすると同時に、単語の意味を読み上げ、授業を受けている生徒たちはそれを書き記していく。単語を読み上げる際には、スクリーンに単語の意味を伝えるイラストや写真も表示された。続くQ&Aでは、教師役の生徒が作成し

た10問の質問文に本文のどの部分の内容なのかを書き添えてある。該当箇所の音声をCDで聴いた後、教師役の生徒から質問を投げ掛けられると、生徒たちは挙手して答えを発言していった。その後のプレゼンテーションはAct out形式を取り、教師役の生徒が登場人物になりきってセリフを話し、解説を加えながら本文を読み進めていく。プレゼンテーションを終えると、ビンゴタイム。授業冒頭で学んだ語彙のワークシートから、9つのマスに各自が選んだ単語を書き込み、教師役の生徒が単語の定義を英語で伝える。生徒たちはそれを聴いて、何の単語を表しているかを挙手して答えていく。最後に授業を受けた生徒が評価シートに感想などを書き込んで提出し、富永先生が講評して授業を終えた。

鉄則その1 “Autonomous Learner”を育てる。

高校の教員として3年間にできることは限られていますが、その中で生徒たちが自分で英語を勉強する方法を見つけてほしいと考えています。いざ、大学入試を前にして受験勉強を始めようとしたときに、それまで受け身の姿勢でしか学習をしていないと、実際に勉強しようにも何から始めたらよい

のか分からないということがあります。そこで、できれば高校2年生のうちに、遅くとも3年生の1学期までに自分の学習スタイルを確立しておくよう指導しています。授業を通して、自分なりに工夫して勉強したり、楽しみながら勉強したりしながら、これができたらこのように世界が広がるんだというような

「夢」を持って勉強してほしいものです。



鉄則その2 コーチングの考えを活かす。

私は野球部の顧問をしています。25年ほど前に読んだコーチングの本に「褒める」ということが書いてありました。当時の自分は「悪いところを修正する」という指導をしていたと気づき、それ以来「生徒たちを褒める」という指導にスタイルを変えました。そして、このコーチングの考え方を野球だ

けでなく、英語の指導にも活用し、授業で実践しています。例えば、英語で質問を投げ掛けたときに、生徒が答えに詰まり黙ってしまったら、気付きを促す質問を加えたり、途中まで言ってあげたりするなどして、一言でも生徒の発話を引き出します。そうして生徒を褒めて、自己肯定感を高めるような工

夫をしています。



鉄則その3 Drillにvariationを持たせる。

授業を組み立てるうえで大切にしているのは、授業構成のパターンをいくつか用意しておき、そのパターンを軸として、授業中に扱うドリルについてバリエーションを持たせ、変化をつけるということです。例えば、ペアワークだけでなく、3人一組、4人一組と人数を変えたり、授業の最後にシャドウイングや

オーバーラッピングをさせたりということ。その他、サイトトランスレーションやセンテンス・ライティングに取り組ませることもあります。“Small Teacher Project”で生徒が行う授業でもドリルのバリエーションがあります。今日のグループはAct out形式で語彙も解説しましたが、他のグループは語彙指導の

際にワークシートに記した英語で定義を読み上げて、それが何の単語かを答えさせるともしています。



鉄則その4 IT機器を利用する。

生徒たちは、校内の英語科専用のCALL教室で、PowerPointなどを使って“Small Teacher Project”で使うプレゼンテーションの資料やワークシートを作成しています。今日の授業でも語彙指導の際に生徒がイラストや写真を表示していましたが、単語をイメージさせ、意味を理解させるの

に効果的です。私を含め、語彙指導の教材をPowerPointで自作している教員もいます。教材を教員間で共有すれば指導内容が共通となり、個々が教材を作成する時間を省くこともできますから、積極的にIT機器を活用したいものです。また、音声を聴かせる際には、スマートフォンをCDプレイヤー

代わりに活用して、教室でスピーカーと接続して音声を流しています。



鉄則その5 “Small Teacher Project”に挑戦する。

生徒が教師役となって指導しますので、授業を担当する日だけでなく、どのような授業を行うのかを考える事前準備から学習となります。語彙指導のワークシートに載せる単語を20個選んだり、本文内容を追ってQ&Aの質問文を作ったりすること自体が生徒にとっては学びなのです。

生徒には、どのような質問をしたらストーリーが分かりやすくなるのかということを考えて作るように指導しています。3学期の定期考査については、“Small Teacher Project”で読んだ教科書本文に関するQ&Aやサマリー、本文の単語などを扱います。授業に積極的に参加していれば対応で

きる試験内容です。



鉄則その6 多読に取り組む。

多読は50語程度の絵本から始めます。『Cinderella』に出てくるswingなど、欧米では幼児期に接しているであろう単語も日本の生徒には分からない場合がありますから、それらが入っている易しい絵本を教室に置いて、生徒に読むように促しています。本校では、日本多読学会の「多読三原則」を生

徒に示しています。①英語は英語のまま理解する、②7~9割の理解度で読む、③つまらなければあとまわし——です。英語や内容が難しい本に手を出しすぎると、読み進められなくなるので、そのような生徒には易しいレベルの本から読むように勧めています。一方、精読は検定教科書を用いて、でき

るだけ丁寧に、できるだけ詳しく読むように指導しています。



鉄則その7 Teamwork makes dreamwork.

Teamworkの「チーム」とは、教員同士のチームを意味しています。例えば「コミュニケーション英語」ではJETのクリス先生と連携しながら、1年生を担当している日本人教員3名でのチームワークを重視しています。そして1年後、2年後を見据えて英語科全体で、小平高等学校の

英語教育というものを考え、教員同士のチームワークを大切にしています。1、2年生の3学期は全クラスで“Small Teacher Project”に取り組んでいますが、私が生徒の事前準備の指導にあたることができないときには、他の2名の教員が生徒の様子を見守り、お互いに助け合いながら

指導をしています。



生徒が自発的に学び、主体性や協調性を高める授業づくりを

安河内 “Small Teacher Project”は興味深い取り組みですね。ワークシートからスライドまで全て生徒が作り、授業を進めているのですか。

富永 このプロジェクトは5年ほど前に始まりましたが、当初は教員がワークシートを準備していたそうです。現在では、語彙のワークシートからQ&A、スライドまで全て生徒が作ります。生徒たちはグループごとに、授業の組み立てから考え、内容理解のために必要なワークシートやスライドを準備します。原稿を用意したら、下書きの段階で教員に提出して添削を受けます。その際にはネイティブチェックも受け、英語での正しい表現を学んでいきます。そして、教員と相談して授業の流れを確認して原稿を仕上げ、練習してから授業に臨みます。

下山 私は2年生を担当しています。1年生での経験を踏まえ、まず前時の復習として穴開きサマリーに取り組み、語彙やQ&A、そして担当したChapter全ての内容についてact outを行います。生徒は実際に演じるだけでなく、スマートフォンで制作した動画を流したり、静止画にアフレコをしたりするなど、いろいろな活動があり、毎回驚かされます。

安河内 “Small Teacher Project”などで扱うペーパーバックを選ぶ観点は？

富永 “I can change!”を観点とし、「何事もプラス志向で取り組みれば自分も変わることができる」というメッセージ性のあるストーリーを選んでいます。

安河内 “Small Teacher Project”に生徒が取り組む姿勢はいかがですか。

富永 今までと違った思考方法で授業の準備をするので、生徒は自発的に授業づくりに取り組み、自分で授業の方法を考えます。そうしてオリジナリティある学習方法を考える力が身に付き、それが受験にも役立つように捉えています。

下山 本校では「授業は英語で行うことを基本」とし、検定教科書は2学期で終わるため授業はとて速く進みます。生徒には、教科書での学びに加えて、3学期には“Small Teacher Project”に取り組むことで、大学入試で求められる速読力や読解力が身に付くことを説明しています。生徒たちは誰も理解したことのない手法で授業をつくってみようという工夫を凝らし、学習意欲を高めています。

富永 本校の生徒は誰もが、学習に一生懸命に取り組む姿勢を持っています。生徒にとって一生懸命やることは当たり前であり、取り組む際に自分で考える力、オリジナリティを持っている生徒が、最終的に大学受験を目前にしたとき、伸びていけると考えています。

安河内 小平高等学校の英語教育では何に重点を置いているのでしょうか。

下山 大学受験のための指導だけではなく、授業を通じて多角的なものの方、考え方を身に付けることを大切にしています。“Small Teacher Project”をはじめ、生徒たちはグループ内で協力しながら、主体的に活動していま

す。このようなアクティブ・ラーニングによる学びを通じて、協調性が身に付くとともに、論理的思考力やコミュニケーション能力も磨かれていきます。英語を学ぶ喜びを感じることで、自律した学習者が育つことを確信します。

安河内 それはまさに、グローバル人材に必要な資質ですね。

栃倉 本校はグローバル人材に必要な資質として、「前に進む力」「人と和する力」「多様性・柔軟性」の3つを掲げています。英語科に限らず、どの教科でも生徒が主体となって活動し、生徒同士が学び合う授業や生徒の発表、討論、プレゼンテーションなどによる参加型授業といったアクティブ・ラーニングの手法を取り入れています。そうして主体性や積極性、チャレンジ精神や協調性、多様性、責任感や使命感を養っています。

安河内 どのような生徒を育てていきたいとお考えでしょうか。

栃倉 本校では現在、「学校経営計画」において「国際理解教育を推進、国際社会に貢献できる生徒を育てる」ということを「目指す学校」として示しています。グローバルな視野を持ち、国際社会に羽ばたいていくことのできる生徒を育てたいと思います。そのためにも、これまでの留学の機会提供や留学生の受け入れなどの取り組みにとどまらず、各教科の授業で横断的な教育内容を取り扱うなどして、世界の国々や日本への理解を深めることが重要であると考えています。(文中敬称略)

私の鉄則

ここでは、読者の皆さんが実践していらっしゃる「鉄則」をご紹介します。多数ご応募くださった中から、安河内哲也先生と編集部で選んだ「私の鉄則」を掲載し、安河内先生からコメントをいただきました。

島根県立松江東高等学校 緒方 孝 先生の鉄則

自分の意思とは 反対の立場に立たせる

例えば、“Is it good for students to join a club activity at school?”と尋ねると、多くの生徒は“Yes.”と答えると思います。しかし、このとき、あえて何割かの生徒には自分の意に反する“No.”の立場になってその理由を言わせるようにします。ペアで意見を言い合うときも、ジャンケンで負けた方が一般的にマイナー派だと思われる立場に立って意見を言わざるを得ないようにするなど工夫しています。どうしても自分にとって受け入れられない価値観は誰にでも存在します。だからといってその価値観を一瞥もくれずシャットアウトすべきではないと思います。「自分とは相いれない相手はなぜそのような意見を持つのか」に思いを馳せることで、流行に流されず物事を多角的、客観的に見る力と、相手を本当に思いやる態度が身に付くと思っています。それは今の時代もっとも大切な「生きるための力」だと思っています。

緒方先生、ありがとうございます。ジャンケンは盛り上がりやすいですね。私も、マイクロディベートの際に取り入れています。違う立場に立つべき理由を明確に教えていただけてうれしいです。心理を探究するためには、違う立場の主張を理解する力が絶対に必要ですよ。



浜松開誠館高等学校 横山 慶 先生の鉄則

授業中は生徒全員が 参加できる活動をメインに行う

生徒個人を指名して答えさせるような訳読や問題の答え合わせ等の活動は、全ての生徒の疑問点や不明点を解決することができません。生徒が主体的に参加できないため、モチベーションも下がりがちです。そこで、一方的な講義形式の授業にならないよう、ICT機器等を利用して、生徒の関心を引き付ける工夫をしています。授業では教師による解説や生徒個人への添削活動は極力排除し、生徒の言語活動や生徒同士の学び合いの時間を中心に組み立てることで、生徒が主体的に授業に参加している状態を1秒でも多く確保しようと心掛けています。

横山先生、ありがとうございます。確かに、一部の生徒だけにフォーカスすると退屈する生徒が出てきますよね。私も、先生の鉄則にしたがって、“Leave no one behind.”の精神で、生徒全員が退屈しない授業を目指します。



募集中!

読者の皆さんの「鉄則」を募集します!

皆さんが実践している「鉄則」を大募集! 選ばれた鉄則に、安河内先生がコメントします!

どしどしご応募ください!
楽しみに待っています!

読者の皆さんが実践していらっしゃる「鉄則」を募集しています。ご応募いただいた中から、安河内先生と編集部で厳選した鉄則を誌面でご紹介するとともに、安河内先生からコメントをいただきます。下の内容をお書き添えいただき、FAXかメールで「英語情報編集部」までご応募ください。

- ① 氏名
- ② 所属(勤務校名)・役職
- ③ 連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)
- ④ 実践している「鉄則」1つと、その詳細内容
- ⑤ 今号で興味深かった記事とその理由
- ⑥ 今後、本誌で取り上げてほしい内容や意見

〈応募の宛先〉 ☎ 03-5439-6879 ✉ eigojoho@morecolor.com

※いただいた個人情報は本件以外の目的には使用いたしません ※本誌で紹介させていただく場合は、学校名・お名前を掲載いたします

interviewer

安河内哲也(やすこうち・てつや)

一般財団法人実用英語推進機構 代表理事、東進ハイスクール、東進ビジネススクール 英語講師、文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」委員を務める。英語学習の楽しさを世に広めるべく、テレビ番組などでも大活躍中。英検1級など英語関連の多数の資格を持つことでも知られる。

栃倉和則校長

富永治彦先生

下山宣子先生

安河内哲也先生



2020年の新テスト実施に向けて

2020年度から導入が予定されている「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」(以下・新テスト)は、どのようなテストになるのか。中学・高等学校においては、新テストで評価される能力を高めるために、どのような指導が求められるのか。本連載では、文部科学省の「高大接続システム改革会議」をはじめ、外国語教育に関する各委員会の委員を務める、上智大学・言語教育研究センター長の吉田研作特別招聘教授とともに、これからの大学入試と日本の英語教育のあり方について探っていく。

国ではどんな議論が進んでいるのか

2016年1月29日、文部科学省は大学入試改革の具体策を話し合う「高大接続システム改革会議」を開き、大学入試センター試験に代わり、2020年度から導入する新テストについて、「当面は複数回実施を見送る」という方針を示しました。

大学入試改革においては、「複数回実施」と「記述式問題の採用」が大きな柱とされています。従来の知識偏重の入試から脱却し、高等学校の学習指導要領で示されている「問題発見・解決の能力」や「思考力・判断力・表現力」を的確に評価するために記述式試験を採用することも検討されるなかで、従来のマークシート式試験と記述式試験を同日に実施で

きるのか、また採点にどれだけの時間を要するのかといった議論がありました。記述式試験の採点には、問題数により10~40日程度が必要であるという試算がなされ、マークシート式試験を従来のように1月中旬に実施する場合、記述式試験は採点期間を考慮すると前年の12月頃に実施する必要があります。これをもし複数回実施するとすれば、さらに日程を前倒して、夏から秋頃にかけて実施しなければなりません。その場合に、高等学校における授業や部活動などの日程への影響や、試験会場となる大学側の負担といった課題が浮き彫りになりました。このような状況を踏まえて、当面の間は複数回実施を見送ることになったのです。

新テストで評価される力とは

新テストにおける記述式試験の採用についてはまず、国語と数学の2教科から導入するとし、2015年12月の第11回同会議にて、それぞれの問題のイメージ例が示されました。国語は、交通事故に関する3つのグラフをもとに、4人が話し合う場面を設定し、空欄に合う意見を指定の文字数で書かせる問題などが例示され、数学は「スーパームーン」に関する記事や図を読み解き、三角比を用いた式を書かせる問題が示されています。

英語においては、イメージ例はまだ出されていませんが、4技能を評価の対象とした出題が検討されています。文部科学省が2013年度に実施した『英語教育改善のための英語力調査事業』ではすでに、4技能を測る問題が出されています。この事業では日本語による指示文での出題でしたが、新テストでは英語での指示文による出題も想定されます。なお、作問や実施、採点については、英語の場合は公益財団法人日本英語検定協会をはじめ、民間事業者のノウハウを効果的に活用することが示されています。他教科とは違い、英語はテスト事業者が多く、テストの妥当性や信頼性に関する研究者も多く存在します。また、中学校や高等学校の先生方も日頃から実用英語技能検定(英検)の面接委員をするなど、外部テストに触れる機会が多くあります。それだけに、どのような問題が作られるかというこ

とに対する期待は大きいでしょう。同会議では、新テストでどのような力を評価すべきかについて、各教科の知識をいかに効率的に評価するかではなく、特に

- ① 内容に関する十分な知識と本質的な理解を基に問題を発見・定義し、
- ② 様々な情報を統合しながら問題解決に向けて主体的に思考・判断し、
- ③ そのプロセスや結果について表現したり実行したりするために必要な諸能力をいかに適切に評価するかを重視すべき。

としています。大学教育においては、こうした諸能力をさらに磨いていくことを重視する、また、高等学校教育においても、多様な進路に応じて必要な能力を伸ばすなかで、こうした諸能力の育成を重視するという、メッセージとセットで打ち出すことが必要でしょう。

4技能を身に付けることの大切さとは

さて、大学入試において4技能を測ることになった背景には、グローバル化の進展により、大学が社会からグローバル人材の育成を求められるようになってきているという実情があります。これは大企業に限ったことではありません。中小企業においても、海外との接点を持つ機会が圧倒的に増えており、国際共通語としての英語を使って仕事をすることのできる人材が必要とされるようになりました。採用の段階で、留学生と同じ土俵で勝負しなければならないという時代になってきているのです。そのような状況を受けて、大学では近

吉田 研作(よしだ・けんさく)

上智大学 言語教育研究センター長。特別招聘教授。上智大学大学院言語学専攻修士課程修了。ミシガン大学大学院博士課程修了。英語教育、バイリンガリズム、異文化間コミュニケーション教育の第一人者。文部科学省の外国語教育に関する各委員会などにも携わり、英語が使える日本人の育成に関する研究、活動を行っている。

年、英語で経済や法律を学ぶなど、専門科目の授業が英語で行われるようになりました。グローバル30やスーパーグローバル大学などのグローバル化に関連する文部科学省の事業により、大学は英語教育のあり方を見直し、英語で学位を修得するコースを設置するようにもなりました。学生には英語で専門科目の授業を受け、英語で議論し、発表するという力が求められます。そのようなアカデミックスキルを大学で伸ばすためには、入学段階で基礎力が身に付いていなければなりません。そこで、TEAPのように、大学入試において、高等学校での学習で習得した英語力と大学での学びに求められる英語力を測る必要性が生じたのです。

現在の学習指導要領においては、高等学校でも英語で授業を行うことが基本とされ、生徒が主体となり英語を使った言語活動中心の授業を行っています。中学校でも次の学習指導要領では、同様に英語での言語活動中心の授業への転換が求められています。生徒が読んだことを話す話したことを書くなど、複数の技能を統合した言語活動を取り入れた授業が行われるようになり、今後、大学入試でも4技能が評価されるようになれば、授業においてもますます4技能化が重視されるようになるでしょう。

英語科教員に求められること

生徒主体の言語活動中心の授業を行うにあたり、中学校や高等学校の英語科の先生には、もっとご自身が英語を使う機会を広げていただきたいと思います。そのためには、教育委員会などで開催する教員研修でも、英語での講演やワークショップの機会を設け、先生方が英語を

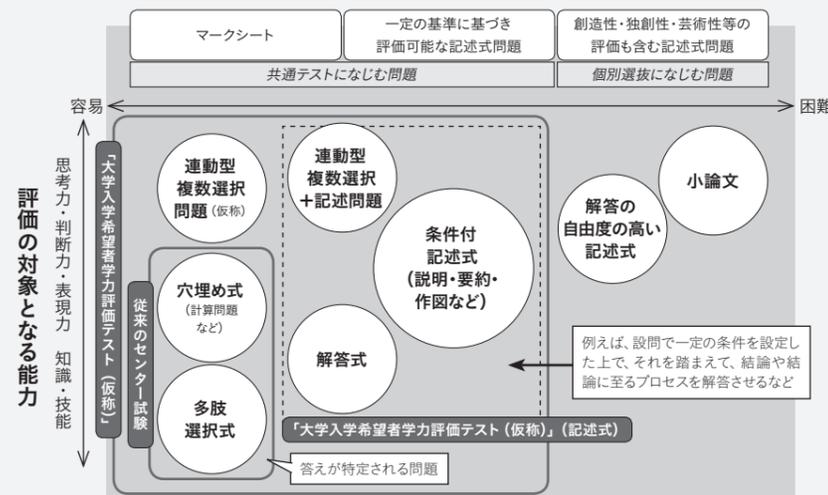
聞いたり、話したり、考えたりするという活動を体験できるようにしていただきたいものです。

中学校や高等学校で出会う先生から生徒が受ける影響はとて大きく、先生が授業などで英語を使う姿を目にすれば、生徒は先生を身近なロールモデルとして意識し、英語を使うことを“当たり前”に感じられるようになるはずで、生徒が自然に英語を聞いたり、話したりする環境をつくるのであれば、生徒の英語力は自然と伸びていきます。英語を使わずして英語力は伸びません。

また、他教科との連携もこれからは必要になるでしょう。大学で専門科目の授業を英語で受けるように、中学校や高等学校においても、英語で社会や理科、家庭科、美術、体育などの内容を学ぶのです。そのような学校全体で、生徒の英語力を伸ばす体制づくりに取り組んでいただけたらと思います。

グローバル化とは単に世界へ出て行くだけではありません。国際的な視野を持ち、地域に根差して、社会に貢献していく人を育てることも大切な視点です。英語を使えることは、自らの将来を切り開くことにつながるのだということを、英語の授業を通して生徒たちに伝えていっていただきたいと思います。

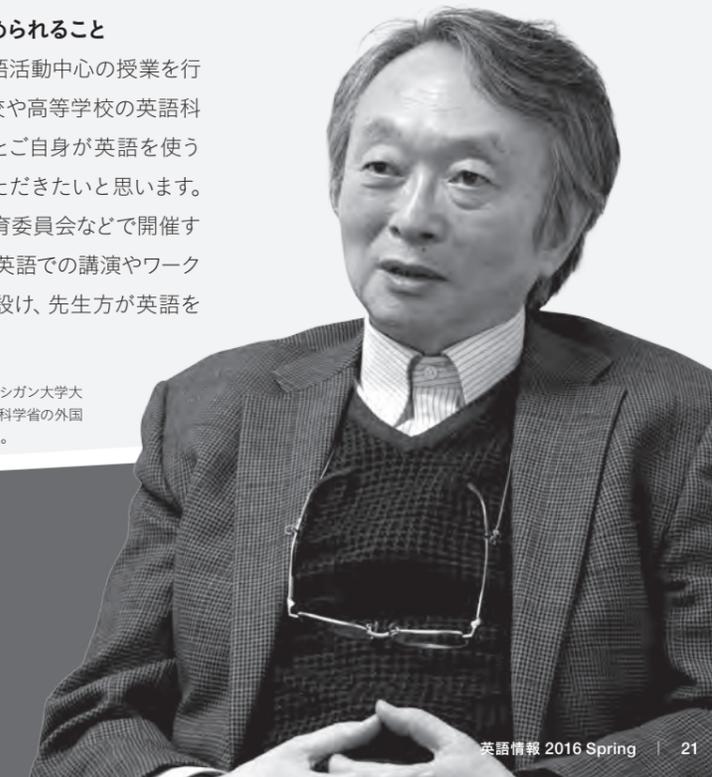
「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」とそれらを評価する方法のイメージ例(たたき台)



※上記、○囲み部分は、あくまで問題形式の一例として挙げたもの。2015年12月22日 高大接続システム会議配付資料より抜粋

大学入試から変わる日本の

英語教育



Shinichi IZUMI

上智大学 外国語学部 教授 和泉 伸一



〔連載〕第1回

言語活動の充実を図る取り組み

本連載では、2016年度に改訂し、2018年度からの先行実施を経て、2020年度に全面実施となる次期学習指導要領が目指す英語教育改革について、特に高等学校に焦点を当てて私見を述べていきたい。連載の第1回目となる今回は、まず「次期学習指導要領の概略とその重要性」について述べておこう。

和泉 伸一 (いずみ・しんいち)

ハワイ大学マノア校客員研究員、オークランド大学客員研究員を経て、2016年4月上智大学外国語学部英語学科学科長、教授。専門は、第二言語習得研究と英語教育。主な著書として、『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』(大修館書店)、『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』(アルク)などがある。

グローバル化と英語教育改革

今回の学習指導要領の改訂は、これまでの改革の方向性に沿って、それをさらに深めたものとなる。とりわけ、グローバル化社会の一層の進展と国際共通語である英語の重要性の増大に鑑み、英語能力を十分に身に付けていくことの重要性が指摘されている。現在進行中の時代の変化の波は高く、広く、また早い。それに悠々と乗って挑戦を楽しんでいけるか、それとも沈み込んでしまうのか、まさに我々は時代の変革期に生きている存在と言えるだろう。

筆者は、本稿執筆の時点でニュージーランドのオークランド大学に在る。ここニュージーランドでは、アジア、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパなど世

界各地からの留学生、移住者、旅行者、一時滞在者で賑わっている。街を歩いていて、誰が生粋のニュージーランド人で、誰がそうでないかを見極めることは難しい。さまざまな言語が聞こえてくるなかで、共通語として人々をつないでいるのは、やはり英語である。しかも、それは必ずしも“ネイティブ的”なものではなく、独自のアクセントとアイデンティティを持って、皆堂々と英語を話している。そこに、変な先入観や偏見などは感じられない。重要なのは、コミュニケーションを取ろうとする意志と態度である。ニュージーランドには、日本からの旅行者もいれば、ワーキング・ホリデーなどでの滞在者も多数いる。その中には、英語で苦労している人も少なくない。皆、日本で最低でも6年間は英語を勉強してきた人たちであろうが、実践力となると、聞き取れない、話せない、かといって読み書きが得意かという、そうでもなかったりする。彼らは一体どのような英語教育を受けてきたのか。もっと教育にできることがあるのではないだろうか。さまざまな思いと疑問に駆られる。

次期学習指導要領は、2020年に迎える東京オリンピック・パラリンピックを見据えたものだが、それは現在、学校で学ぶ子供たちが社会で活躍するであろう30年後も視野に入れたものでもある。その時の日本は、多文化・多言語・多民族の人たちが、協調と競争する国際的な環境となることが予想され

る。現在のニュージーランドの姿が、そのまま日本に当てはまる可能性もある。英語はもはや「飾り」や「一部エリートが持つ武器」ではなく、「生活の手段」「必須の道具」となる。「発音がネイティブのよう」、「問題集が解ける」、「検定試験で高得点が取れた」だけでは済まされない時代となる。そこでは、「英語を使って何ができるか」が重要となるのであり、“静的な知識”の“保有”ではなく、“動的な知識”の“活用”が重視される時でもある。次期学習指導要領は、そういったことを視野に打ち立てられたものと解釈できる。

「思考力・判断力・表現力」の育成

次期学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能の習得を大切にしつつも、それを活用して主体的に課題を解決していくための「思考力・判断力・表現力」の育成を目指している。これを単なるスローガンとして理解すべきではない。言うまでもなく、英語は言葉であり、言葉は使う人の思考力や人格を越えて使えるものではない。その人がどういったことを学び、何を考え、どう判断して、何を言うのか、そしてどう行動するのか、それら全てが大きく関係したなかで言葉は使われていく。

思考力・判断力・表現力の育成を目指す英語教育では、「英語を実践的に使用する」ということを後回しや生徒任せにするのではなく、教育の根幹に据えようとする。言葉とその伝える内

容について「考えさせ」（単に「理解させる」ではない）、その意味・意義と目的について「判断させ」（単に「覚えさせる・答えさせる」ではない）、そこで感じ、考えたことを「表現させる」（単に「繰り返させる・訳させる」ではない）試みである。まさに、英語教育がその意義を実現し、学びの醍醐味を最大限に味わえる方向へと進もうとしていると解釈できよう。

「授業は英語で」「言語活動の高度化」そして「パフォーマンス評価の導入」

次期学習指導要領では、現行の「授業は英語で行うことを基本とする」はそのままに据え置き、4技能統合型を核とした「言語活動の高度化」が求められる。そこでは、発表、議論・討論、交渉等の言語活動を多く授業に取り入れ、その関連で言語指導を行っていくことが必要となる。評価方法も、「文法や語彙等の知識がどれだけ身に付いたか」ではなく、「英語を用いて何ができるようになったか」という観点から見るため、面接、スピーチ、エッセイ等のパフォーマンス評価をより広く取り入れていくことが求められる。当然、高等学校・大学の入学者選抜方法の改善も求められ、4技能からなるコミュニケーション能力が評価される方向になってこよう。

まさに抜本的な改革が迫られている状況だが、そこで示されている内容は、これまでの改革の方向性を踏まえたものであり、驚くほどの変化が加わったわけではない。トップダウンの改革を勝手に押し付けられたと捉えるよりも、その内実と背景をしっかりと理解した上で、今自分が何をすべきなのかをボトムアップで考え、行動していきたい。現在教えている生徒が、2020年、2050年になった時、どう活躍できるようになっているのか。まさに今ある教育の本質と価値が問われることになる。こういった理解をもとに、次回からより具体的な英語授業改革への考えを紹介していきたいと思う。



ニュージーランド・オークランドのウォーターフロントから市街地を臨む（筆者撮影）

Kouichi ANO

文教大学 国際学部 教授

文教大学大学院 国際学研究科 教授

阿野 幸一



〔連載〕第1回

「授業は英語で行うことを基本とする」への取り組み なぜ英語を使うのでしょうか？

次期学習指導要領では、中学校でも「英語で授業を行うことを基本とする」という方向性が打ち出されています。

本連載では、その意義を確認しながら、実際に中学校の教室で授業を行う際の方法や留意点について考えていきます。

第1回は「なぜ授業を英語で行う必要があるか」についてです。

阿野 幸一（あの・こういち）

文教大学国際学部教授・同大学院国際学研究科教授。専門は英語教育、応用言語学。主な著書に、中学校検定教科書『NEW HORIZON English Course 1・2・3』（共著、東京書籍）、高校検定教科書『All Aboard! Communication English I・II・III』（共著、東京書籍）、『みんなの楽しい英文法 - 「スタンプ例文」でわかる英語の基本』（NHK出版）など。NHKラジオ『基礎英語3』講師（2008-2012年度）、同『基礎英語2』講師（2013-2015年度）。

中学校でも「英語で授業」

学習指導要領の改訂に向けて、中学校では「互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う対話的な言語活動を重視した授業を英語で行うことを基本とする」という方向性が文部科学省から打ち出されています。現行の高等学校学習指導要領で「授業は英語で行うことを基本とする」と公示されて以来、多くの高等学校の英語の授業が変わりつつあります。ただ一方では、今なお、英語で授業を行うことに対して批判的な意見も聞かれます。「英語で説明をしたら生徒が理解できない」「文法の説明を英語で行っても生徒は混乱するだけ」といった、「英語で授業」の本来のねらいとは異なる次

元での意見がほとんどです。また、これまで日本語で行ってきた授業の使用言語を英語に切り替えただけで、授業の進め方は変えずに、教師が一方的に英語を話している授業があるのも現実です。小学校で音声を中心として英語に慣れ親しんできた生徒たちにとって、中学校でも英語を使いながら学ぶ授業で引き継いでいくことは、小・中連携の観点から極めて重要です。実際に、中学校に入学して日本語による説明中心の授業になり、英語学習に対する意欲を失ってしまう生徒が多いことも忘れてはいけません。

本連載では、英語で授業を行う意義を確認しながら、実際に中学校の教室で授業を行う際の方法や留意点について具体的に考えていきたいと思います。第1回の今回は、なぜ授業を英語で行う必要があるかについて述べていきます。

「英語で授業」のねらいと効果

英語の授業は、英語という言葉の技能を身に付ける実技教科と考えることができます。もし、次のような授業があったらどうでしょうか？「運動をしない体育の授業」「歌を歌わない音楽の授業」「絵を描かない美術の授業」、どれも授業として成立しなくなるはずですが、では、「英語を使わない英語の授業」はどうでしょう？

「生徒に理解させるためには、授業は日本語で説明した方がいい」という考えは、「生徒が頭で理解すれば、自然と英語はできるようになる」という前提が必要になります。つまり、「単語を覚えて文法のルールを理解すれば、自動的に生徒は英語を使えるようになる」という前提とも言えます。水泳の授業で、教師が教室で泳ぎ方をいくら熱心に解説しても、それだけでは生徒が泳げるようになることはありません。教師と生徒と一緒にプールに入り、教師が実際に泳いで手本を見せ、生徒も泳ぐ練習をするなかで、教師が適切なアドバイスを与えることで少しずつ泳げるようになって

いくものです。評価に関しても、筆記テストで泳ぎ方の知識を問うのではなく、どのくらい泳げるようになったかで評価をします。生徒は「泳げるようになる」という具体的な目標に向かって努力し、達成感を味わうことができます。英語も同じです。教室で教師が日本語で説明し、生徒に知識を与えて理解させたとしても、それだけで生徒の英語力が伸びることはないでしょう。教師からの英語によるインプットを吸収し、生徒自身が英語を使いながら身に付けることが大切です。英語を使えるようになるという目標に向かって学習し、どのくらい使えるようになったかで評価することが必要なのです。単語集で単語の日本語訳を暗記し、文法問題集をこなしていても、英語を聞いたり話したりできるようにならないばかりでなく、コミュニケーション能力を問う都道府県の高校入試問題の筆記テストでも、良い成績を取ることができない現状があります。生徒が英語を使う環境を教室につくることで、生徒の英語力は伸びていくのです。

英語教師がどのくらい授業で英語を使っているかという調査が行われていますが、「英語を使っているかどうか」だけではなく、「どのように英語を使っているか」に視点を切り替える必要もあります。英語で授業を行うことによって、教師の英語力は伸びていきますが、授業を通して伸ばさなければならないのは生徒の英語力です。教師が授業で英語を使うのは、あくまで生徒の英語使用を促すためで、生徒を英語の使用者にするために教師も英語を使うという本来の目的を忘れてはいけません。生徒が発話する間もないほど教師が一方的に話しているのは、英語で授業をする意味がなくなってしまいます。

教師が使う英語

「英語で授業」が話題に上る際に、教師が英語で授業を行うことができる英語力を備えているかという議論が行われることがあります。では、英

語で授業を行うための教師の英語とはどのようなものなのでしょうか？

ここでも、体育の例で考えてみましょう。体育の授業でサッカーの指導をする体育の教師はJリーガーではなく、サッカーに関しては素人の場合も多いでしょう。つまり、高度なサッカー技術を備えた専門家ではありません。それでもサッカーについて研究し、指導の工夫をすることで、生徒のサッカーに対する興味関心を引き出し、サッカーの技術を高めることができれば、もしかすると将来サッカー選手になる生徒が出るかもしれません。英語の授業でも同じことがいえます。私たち教師は英語のネイティブ・スピーカーではありませんが、生徒と一緒に「グラウンド」である教室で英語を使うことで、生徒の英語によるコミュニケーション能力を養うことが可能になります。そして、将来英語を使って仕事をする多くの生徒を育てることが出来ます。もちろん、教師自身が英語力をアップさせるための研修を続け、指導法の研究をして授業改善を図らなければならないのは言うまでもありません。

教師が使う英語は、生徒にとって最も身近なインプットになります。ですから、生徒の学習モデルになる英語、生徒の言語活動を促す英語を、教師自身が使うことが必要です。まずは、中学3年生までの教科書レベルの英語を間違いなく、正確に使いこなせるようになることです。そのためにも、教科書本文をしっかりと再生できるようにしておくことで、教室でも自信を持って英語が使えるようになる土台ができ、生徒に適切なインプットを与えることができます。授業でもっと英語を使いたいと思っている先生方には、授業準備の中で教科書の音読量を増やすことから始め、生徒のための「英語で授業」を実践していただけたらと思います。

今回は、文法指導をどのように英語で行えばよいかについて考えていくことにします。

Ken OSHIRO

琉球大学 教育学部 教授 大城 賢



〔連載〕第1回

小学校中学年での外国語活動や 高学年の教科化に向けて今からすべきこと

2016年度のうちに新しい学習指導要領が告示され、2020年度には新しい学習指導要領に基づく授業が全面実施される予定です。文部科学省から公表された資料によると、小学校中学年では年間35コマの「外国語活動」を開始され、高学年においては年間70コマ（35コマのモジュールも想定）の「教科」としての英語がスタートします。今回は、中学年の外国語活動や高学年での教科化に向けて、読者の皆様の質問に答える形で、今からすべきことについて考えてみたいと思います。

大城 賢（おおしろ・けん）

琉球大学教育学部卒業。琉球大学大学院教育学研究科（英語教育専修）修了。国立大学法人琉球大学教育学部教授。同附属中学校校長、同附属教育実践総合センター長などを歴任。学外の役職として、日本児童英語教育学会副会長、小学校英語教育学会常任理事、文部科学省研究開発学校企画評価会議委員など。

教科化された場合の 目標や内容は？

高学年では「聞いたり話したりすることに加えて、読んだり書いたりすることの態度の育成も含めたコミュニケーション能力の基礎」を育成することになります。ただし、教科になるからと言って、発音とつづりの関係が理解でき、英語の文章を書いたり、読んだりすることができるようになることを目指すのではありません。読み書きに関しては、あくまでも「態度の育成」とされています。教科となっても、外国語活動で培った「聞くこと」や「話すこと」に加えて、「読むこと」や「書くこと」にも慣れ親しむ活動を取り入れていくことになる、と考えておくとい良いでしょう。（下線筆者）



どんな準備が必要ですか？

まずは、現在の外国語活動を充実させることです。これまでの外国語活動の成果として、「積極的なコミュニケーションへの態度等が育成されたこと」が挙げられています。教科化は現在の外国語活動を否定して導入されるものではありません。むしろその逆で、外国語活動の成果が認められたからこそ、中学年へと拡大し、また、高学年への教科化へと発展したと考えるべきです。外国語活動で培った指導技術や教材は、教科化された時にも必ず生かされるものになりますから、小学校の先生方には、現在の外国語活動の目標や内容を再確認したうえで、授業に一層磨きをかけていくことが求められます。

高学年の授業は専科の先生が担当するの？

教科化された場合の高学年の指導体制は、小学校教員が英語の指導力に関する専門性を高めて指導するとともに、専科指導を行う教員を活用することなどが示されています。高学年の英語指導からは小学校の先生が手を引くことになるのでは、と考える方もいらっしゃるようですが、文部科学省の公表資料を見る限り、そのような形になることはなさそうです。小学校の先生が自ら専科教員となって指導する場合が想定されるとともに、外部から専科教員が導入される場合は、学級担任という立場で、チームティーチング（TT）の形で授業に関わることになるでしょう。

中学年の授業は誰が担当するの？

中学年の外国語活動の授業は、学級担任がALT等を一層積極的に活用するなどして、TTの体制で指導を行う方向性が示されています。これは現在、高学年で行われている外国語活動と基本的には同じ指導体制です。

いつから準備を始めれば良いですか？

2020年度に高学年での教科化が始まるということは、2020年度以前には中学年での外国語活動を行っておく必要があると考えられます。教科化の内容は、中学年での外国語活動を踏まえたものになることは明らかです。そうであるなら、外国語活動の体験なしに教科化が始まることは考えられません。

ほかにもすべきことはありますか？

「小・中連携」と「小・小連携」です。すでに小・中連携を進めている学校もあると思いますが、全国的にはまだまだ進んでいないのが現状です。中学校の先生方は、現段階から積極的に小学校の授業に関わり、体験しておくことで、外国語活動の良さを生かした授業をつくることができるでしょう。また、同じ中学校区内で小学校の指導内容にばらつきがあれば、中学校との連携はうまくいきません。小学校同士の連携を密にし、指導内容について情報交換を行うことが、スムーズな教科化、さらには中学校以降の英語教育の充実につながることでしょう。

大学で必要な英語力を測る TEAPとは?

2014年度よりスタートし、国公私立大学における入学試験での採用が広がるTEAP (Test of English for Academic Purposes)。大学で学習・研究をする際に必要とされるアカデミックな英語4技能の運用能力を、より正確に測るテストとして、大学や高校など教育関係者から注目を集めている。ここであらためて、TEAPについて紹介しよう。

大学で必要とされる英語力を総合的に測定

TEAPは上智大学と公益財団法人日本英語検定協会が共同で開発したテストだ。大学や留学先での学習・研究に必要とされる場面を想定した英語力(英語で資料や文献を読む、英語で講義を受ける、英語で意見を述べる、英語で文章を書くなど)を、4つの技能別に正確に測定する。受験結果は国際的な評価基準に基づいた「スコア」と「バンド」で表示。成績表には、現在の英語力でどのようなことができるかという目安(CAN-DOリスト)も記される。

高校3年生に適切な出題レベル

その難易度は、実用英語技能検定(英検)準2～準1級(CEFR A2～B2)程度。日本の高校3年生の英語力を測定するのに適切なレベルに設定されている。近年、TEAPなどの外部の資格・検定試験が大学入試に導入されるようになったことを受けて、2015年度のTEAPの総志願者数は1万3,126名に達し、前年度比約30%増となった。

採用大学が広がっている

2015年度入試までは推薦入試やAO入試での採用も多かったが、2016年度入試では、上智大学や立教大学をはじめ、全国的に一般入試でTEAPを採用する大学が広がってきた。また、2017年度入試においても、早稲田大学の文化構想学部・文学部での一般入試、明治大学経営学部での一般選抜入試なども採用が発表されている。

採用大学の最新情報は、今後もTEAPウェブサイト(<http://www.eiken.or.jp/teap/group/list.html>)にて随時更新していく。

2016年度開催日程

2016年度については、7月、9月、11月の年3回実施予定。

第1回

7月24日(日)

第2回

9月25日(日)

第3回

11月20日(日)

試験会場

札幌、仙台、埼玉、千葉、東京、神奈川、静岡、名古屋、大阪、広島、福岡の全国11都市で開催予定。

※試験会場は、申込時に受験者が選択。
※各会場での実施技能は、申込時に確認のこと。
※埼玉、千葉、神奈川での受験を希望する場合、申込画面で「東京」を選択する。



受験資格

高校2年生から受験可能。スコアは取得後2年度の間有効。

※受験年度に高校2年生となる生年月日以前の生まれであること。
※2016年度に受験する場合…2000年4月1日以前の生まれであること。
※障がい者特別措置があります。

TEAPについての詳細は…

TEAP

<http://www.eiken.or.jp/teap/>

お問い合わせ:
英検サービスセンター TEAP運営事務局
TEL: 03-3266-6556
※平日9:30~17:00(祝日を除く)

TEAP活用事例 第7回: 早稲田大学

早稲田大学が目指すビジョンと 高大連携を視野にTEAP導入

2017年2月に実施される2017年度入試より、文化構想学部・文学部でTEAP等を活用した「英語4技能テスト利用型」一般入試が導入される。TEAPなどの英語4技能テストで基準点を上回る受験生について、国語・地歴2教科の合計点で判定するものだ。

「英語4技能テスト利用型」一般入試にTEAPが導入された理由は2つ。1つは、高等学校の学習指導要領に基づく高大連携を推進するため。もう1つは2032年までに外国語による授業を50%にするという「Waseda Vision 150」の数値目標に合わせて、両学部では「英語による授業で単位を取得できること」を目指しているためである。

TEAP導入は「4技能への道」 への重要なプロセスの1つ

しかし、TEAP導入に至るまでに、同学部では10年以上にわたる改編プロセスを踏んでいることを忘れてはならない。

まず2004年度、同学部は「4技能への道」の第一歩として英語カリキュラムの全面的な改編を行った。技能別科目から目的別科目(4技能統合型)へ、教授言語は全て英語(訳読からの脱却)などを断行。安藤教授は「このときから、1年次の必修英語の授業を全て英語で、さらに4技能で行っています」と言う。

2007年度には、学部再編(文化構想学部・文学部設立)を機に、全面的な英語入試問題の改編を実施。①指示文を含め全て英語に(和訳的な問題の排除)②英語による英文要約問題の導入③サンプル問題の提示へと歩みを進めた。ところが、安藤教授たちが望んでいた入試でのリスニング試験は、運営面

での問題などもあり先送りに。「私たちは、英語4技能教育を反映した入試を実施したいという気持ちが強かったのです。それを知った事務スタッフが『TEAPという試験をご存知ですか?』と情報を教えてくださいました」と安藤教授。そして、TEAPのサンプル問題を確認し、「質が高く、高等学校で教える内容と、私たちが求める内容に合致し、高大連携にも、大学のアカデミックな部分にも対応していると感じました」と語る。

そして、安藤教授たちはTEAP導入を目指して行動を開始。2013年10月、上

智大学を訪問し、言語教育研究センター長の吉田研作教授(当時。現特別招聘教授)よりTEAPについてレクチャーを受けた。「吉田先生の『TEAPを活用して入学した学生に、より4技能を磨いて専門科目を英語で学ぶ方向につなげていきたい』というお考え、高等学校から大学卒業までを見通し、一貫した英語教育の実施を前提としてTEAPを創り上げたという点に強い賛意と感銘を受けました」と当時の振り返り。そして、2年間にわたる学部内の協議を経てTEAP導入を決定し、ついに2017年度入試からの実施に至った。

高大連携にも、大学のアカデミックな部分にも 対応したTEAPの質を高く評価し、導入

早稲田大学文化構想学部・文学部は2017年度入試より、新設する「英語4技能テスト利用型」一般入試でのTEAPの採用を決めている。2004年から「4技能への道」を歩んできた同学部は、入試についても4技能を測りたいと願っていた。しかし、その道のりは平坦ではなく、さまざまな問題をクリアしたうえでTEAP導入が実現したという。同大文学部文化構想学部の安藤文人教授に、4技能への道のりとTEAP導入の意図について伺った。



早稲田大学 文学部文化構想学部 安藤文人 教授

世界水準で活躍する人材を

TEAPを活用し、同学部が求める学生は「4技能にわたって言語を『使おう』とする学生」だ。「近年では、『話したい、書きたい』と学生が英語を実際に使いたがっています。課題でも、求める以上に長く書いてくる学生が目立ちます」と、安

藤教授は笑顔を見せる。4技能入試を導入する2017年度には、英語学位プログラムも開設する。安藤教授は「今、世界中の学生が、英語で発信し、互いに意見をシェアし始めている。私たちの学生が、その大きな輪から取り残されないよう、英語教育の改革が必要なのです」と、力を込めた。

留学が多様化する今、イギリス留学ならではの魅力とは？

～ブリティッシュ・カウンシルに聞く、グローバル時代のイギリス留学～

伝統と革新の双方の魅力にあふれ、英語の発祥の地であるイギリス。

世界各国から学生が集まる、人気の留学先だ。

留学という選択肢が広がりつつある今、

イギリスで学ぶ魅力とは何だろうか。

また、イギリス留学を目指す生徒のために、

教育現場ではどのような対応ができるのだろうか。

イギリスの公的な国際文化交流機関である

ブリティッシュ・カウンシルを訪ねた。



United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland

© VisitBritain Andrew Pickett



ブリティッシュ・カウンシル 試験部長の
安田智恵氏



ブリティッシュ・カウンシル プロジェクト・
マネージャー(教育推進・連携)の
ハル・パーカー氏



イギリス留学の情報が満載の
ブリティッシュ・カウンシルの英国留学サイト(日本語版)
<http://www.educationuk.org/japan/>

© VisitBritain Joanna Henderson

国際的に評価される、質の高い教育 生涯役立つ「クリティカル・シンキング」を教授

日本人の留学先として、英語で教育を提供するアジア諸国への人気が高まっているものの、不動の人気を保っているのがイギリスだ。「日本人の海外留学状況」(2015年2月文部科学省発表)によると、現在、英語圏ではアメリカ合衆国に次いで、日本人にとって世界で2番目に人気の留学先である。

ブリティッシュ・カウンシルで留学分野を担当するプロジェクト・マネージャー(教育推進・連携)のハル・パーカー氏が挙げた複数の特長より、ここでは3点を取り上げたい。1つ目は、その「教育の質の高さ」だ。世界の大学ランキングを調査・発表する「QS World University Rankings® 2015/16」では、世界の大学トップ10のうち実に4校をイギリスの大学が占めた(3位ケンブリッジ大学、6位オックスフォード大学、7位ユニバーシティ・カレッジ・ロ

ンドン、8位インペリアル・カレッジ・ロンドン)。このような国際的な高い評価に加え、イギリスはいち早く英語コースを開講する教育機関の認定制度「アクレディテーションUK (Accreditation UK)」を導入するなど、教育の品質管理を行ってきたという。

2つ目は、「クリティカル・シンキング(批判的思考)が学べること」。相手の意見を鵜呑みにせず批判的に捉え、自身の意見を持つ論理的な思考術のことだ。パーカー氏は、「“クリティカル(批判的)”という言葉は、日本ではネガティブなイメージで捉えられがちですが、クリティカル・シンキングはイギリスではむしろポジティブに捉えられます。議論に新たな観点加わるためです。国際ビジネスの場など、生涯にわたりあらゆる場面で役立つスキルで、イギリスの教育現場では小学生から学びます」と解

説する。クリティカル・シンキングに不慣れな日本人留学生も多いと聞か、国際スキルを身に付ける得難い機会だともいえる。

3つ目は、「専門性の高いカリキュラム」だ。イギリスの教育制度(スコットランドを除く)では、一般的に学士号を3年間、修士号を1年間と、日本よりも短い期間で取得できる。「日本の大学のような教養科目がなく、入学してすぐに専門分野を学びます。目標をはっきりとしており、専門分野を集中して学びたい人にお勧めです」と、パーカー氏。また、日本人留学生の多くは、入学前にアカデミックスキルや英語の基礎力を伸ばすために、9カ月間の「大学進学準備コース」に通うケースが多い。この期間を含めても計4年間と、日本の大学に進学するのと同じ期間で卒業できる。そのため、就職活動の遅れなどの心配も軽減される。

「中高生イギリス英語留学フェア」を初開催 英語試験IELTSは留学後の学びに直結

ブリティッシュ・カウンシルの英国留学サイト「Education UK (<http://www.educationuk.org/japan/>)」では、イギリス留学の概要から学校・コース内容まで調べることができる。「トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム 高校生コース」対応コースなどの最新情報も提供中だ。

ブリティッシュ・カウンシルが主催する年2回(春・秋)開催の「英国留学フェア」(東京)には、毎年多数の教育機関が参加。イギリスから来日する各教育機関の担当者と対面で相談ができる貴重な機会として、全国から留学検討者や学校関係者が訪れる。留学経験者の相談ブースや英語対策のための相談ブースなども人気だという。加えて今年、「中高生イギリス英語留学フェア」(東京)を4月23日(土)と、5月14日(土)に開催する。その背景には、中

生向けの短期留学の問い合わせが急増するなど、留学の早期化傾向がある。

一般的にイギリス留学では、入学時に英語能力判定テストIELTSのスコアなどの英語力証明が求められる。IELTSは年間250万人が受験する、世界最大級の英語4技能試験だ。ブリティッシュ・カウンシル試験部の安田智恵部長は、「IELTSは英語の実使用場面に即した試験。筆記では紙と鉛筆を使い、スピーキングは生身の英語ネイティブ・スピーカーとの対面です。日本で受けてきた教育と親和性が高いため、実力が発揮しやすいでしょう」と試験特性を分析する。またIELTS対策は、「イギリス留学の準備としてもふさわしい」という。「IELTSは、もともと留学の入り口として作られた試験。リーディングではスキミング スキミングの技術、ライティングでは批判的かつ論理的に主張を書く技術が求め

られ、それらは留学後に役立つ力です」

さらに安田部長は「IELTSを英語科の授業アイデアとしても活用してほしい」と提案する。ただし、「クリティカル・シンキングは、いきなり英語ではハードルが高いため、まずは日本語でプロセスの練習から。ライティングやスピーキングは先生方の負担が多くなるため、ALTと協力するとよいでしょう。いずれも無理のない範囲で、授業に組み込むことをお勧めします」と補足する。

イギリス留学やIELTSの最新事情を知ることで、グローバル時代の教育のあり方や、国際社会で求められるスキルが見えてくるだろう。パーカー氏は、「イギリス留学は英語が身に付くだけでなく、生涯の財産になります。多様な価値観に触れ、自立して生活することは人間としての成長につながります」とエールを送る。



まずは「英語はツール」の理解から

1895（明治28）年に大阪府第二尋常中学校として開校した大阪府立三国丘高校。「自主・自立」「文武両道」「切磋琢磨」の“三丘スピリット”を受け継ぎ、2015年には創立120年を迎えた伝統校だ。2010年度には大阪府教育委員会から「進学指導特色校グローバルリーダーズハイスクール（GLHS）」の指定を、2015年度には文部科学省から「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」の指定を受けた。また、大阪府内の10校に新たに配置されたSET（Super English Teacher）による、高校3年間で英語力を英語圏の大学に進学できるレベルに高めるための授業も2015年からスタートした。

GLHSに指定される少し前からは、

毎年数十名の生徒がオーストラリアへのスタディツアーに参加。2週間、ホームステイをしながら英語研修などを受けている。こうして国際交流プログラムの下地を作り、SGHとなった現在は、「Creative Solution I・II」という科目を設け、アメリカ・オレゴン州ポートランド市のメルルハースト大学（PIA）による派遣授業を毎週開催し、2名のネイティブ教員が1年生に対して、同市の環境配慮型都市計画やビジネスの基礎について講義。また、グローバルリーダーや国際公務員としての基礎を、元国連開発計画開発政策局長の先生ほか第一線の方から学び、英語指導のほか、京都大学での課題研究発表などを実施。3月には1年生がメルルハースト大学（PIA）を訪れ、フィールドワー

クなどを行う。これら1年次の目標は、「英語はツールであること」の理解だと山口智子校長は言う。

2年生になると、途上国の現状を理解する取り組みも進められ、国連開発計画（UNDP）やアジア開発銀行での研修用テキストを使った授業のほか、夏期休暇中にはフィリピン・マニラでの現地実習を実施。途上国が抱える国際問題を自分の問題として捉え、課題解決に向けてアプローチしていく。こうして1、2年生で先進国と途上国の実情に触れ、その集大成として取り組むのが、東南アジアにおけるBOP（ベース・オブ・ピラミッド）層と呼ばれる貧困層への支援策・ビジネスプランの作成だ。アメリカ研修生徒とフィリピン研修生徒が混合でチームをつくり、それぞれの

得意分野の知識や国内外での経験をベースに意見交換。教員のサポートのほか、生徒自らが企業にヒアリングを行うなどして、プランを練り上げる。2015年度に開催された「第3回高校生ビジネスプラン・グランプリ」には同校から6チームが出場。フィリピンにおける人材育成を、フィリピンでの貧困対策と日本国内の労働者不足問題に直結させるプランを策定したチームは、参加した全2,333チーム中でファイナリストとなる10チームに残った。

多様な個性や志望に応える 全方位型プログラムを展開

同校は、2010年度には文部科学省から「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」の指定も受けている。「NASA・

多彩な経験と気づきが国境を越える

大阪府立三国丘高校 山口 智子 校長

FITサイエンスツアー」というプログラムも大きな特徴だ。これは、アメリカ航空宇宙局（NASA）や、フロリダ工科大学（FIT）を訪問し、科学者に求められる国際的視野を養うもの。NASAの第一線研究者からは、スペースシャトルという閉鎖空間におけるリサイクル事例などを学ぶ。もちろん講義はすべて英語だ。かつて宇宙飛行士としてスペースシャトルに搭乗し、日本人初の宇宙船外活動を行った土井隆雄氏の母校ならではの取り組みともいえる。一方で、地域の小学生や中学生に向けた「科学教室」も行い、生徒は「グローバル」と「グローバル」の両面で経験を積んでいく。

また、医学部への進学を希望する生徒には、大阪大学医学部での先端医療体験や、地元病院での地域医療体験を実施。「三丘セミナー」では、大学で教壇

に立つ同校の卒業生を招き、iPS細胞や異常気象、観光、法律、広告など、多彩なテーマでの講演が行われている。

他方で、1、2年生の約95%が運動部20部と文化部17部のいずれかに所属している同校では、文武両道の実践と同時に、運動部の海外交流にも積極的だ。サッカー部は韓国、野球部は台湾と交流を行った実績があり、現地での合同練習や授業で親交を深めてきた。

その他にも、オーストラリアや中国、韓国などから高校生が来校する機会があるほか、東京大学へのキャンパスツアーや、1年生全員の京都大学見学会、大阪大学への大学体験入学など、大学研究機関との連携も盛んだ。

このように、同校では国際交流や進学、将来設計につながるよう、あらゆる角度から多面的に課外プログラムを展

開している。生徒たちにとって国際交流で異文化環境を目の当たりにし、視野を広げるとともに、日本の良さを再認識する契機にもなっているという。各プログラムに参加できる生徒数は限られるが、周囲の生徒への大きな刺激ともなり、好循環を生んでいるようだ。

経験と自覚が海外進学の意志を強固に

「先進国や途上国を問わず、海外の異文化環境に身を置く経験は、自分に足りないこと、必要なことに気付く絶好のきっかけとなります。だからこそ、英語に限定されない向学心が芽生え、英語以外の教科に取り組む姿勢にも好影響を与えています。その結果、選択肢の1つとして『海外進学』が増えていくのだと思います」と、山口校長は分析する。在学中に高大連携プロジェクトの

原動力に

一環で交流のある京都大学や大阪大学への安定した進学実績を誇る同校だが、関西の難関大学のほか、国内各地のスーパーグローバル大学（SGU）や、海外の大学への進学を考える生徒は、今後さらに増える見込みだという。

「SGHやSSHのコアな活動は1、2年生が中心となりますが、『グローバル』への意識は確実に高まっており、本校のプログラム以外で自主留学をする生徒や、高校卒業後に海外の大学に進学するケースが増えています。3年生になると本格的に受験勉強へとシフトしますが、忘れてならないのは、あくまでも大学は通過点だということ。その先の未来を見据えた大学進学が望ましく、自分の将来を切り開くために、海外進学を決断する生徒がいれば、万全のサポートを行っていきます」と締めくくった。





第7回 新潟県立国際情報高等学校

ふるさとの魅力発信を通じて 国際舞台に羽ばたく人材を育成

県内トップクラスの大学現役進学率を誇るとともに、海外研修や海外大学への進学にも力を入れている新潟県立国際情報高等学校。地域の特性を掘り下げつつ、異文化を理解し、他者と協力できる人材の育成を目指しており、掲げた構想は「【雪国*米どころ*魚沼】の世界発信を通じた人材育成」だ。



海外研修で魚沼の魅力や課題を英語でプレゼンテーション

ワンランク上の グローバル人材育成を目指して

上越新幹線が通るJR浦佐駅を最寄り駅とする新潟県立国際情報高等学校は、新潟県内で唯一のSGH指定校だ。国際社会に通用する英語力を養う「国際文化科」と、医歯薬系・理工系への進学に欠かせない数学・理科を重視する「情報科学科」という2つの学科を軸に、少人数制でじっくりと指導することにより、1992年創立とまだ若い学校ながらも全国の国公立大学や難関私学に多くの現役合格者を輩出している。また2年次からは、海外大学へ直接進学を目指すコースに所属することもできる。

「本校はアメリカやオーストラリアに姉妹校を持ち、海外の高校生との異文化交流なども積極的に行っています。今回のSGH申請にあたっては、本

校の国際的な取り組みをもう一度整理し、ワンランク上のグローバル人材育成を目指していこうとのねらいがありました」と玉木正己校長は語る。

同校が位置するのは「魚沼コシヒカリ」に代表される日本有数の米どころであり、冬は周辺のスキー場に多くの観光客を呼び込む南魚沼市。この地域の魅力や抱える課題を深く掘り下げながら世界に発信することにより、世界各地の課題についてグローバルな視点から考察・提案できる人材を育てていく。SGHのカリキュラムはこうした方針に沿って進められることになった。

活動の基本となる思考力を養い、 地域に対する知識を深める

同校のSGH学習は2015年度より、1年生全員を対象にスタートした。まず

は生徒の論理的・批判的な思考力を養うために「国際情報クリティカルシンキングプログラム」を実施。一般企業から与えられたミッション（課題）に対してグループディスカッションを行い、校外でアンケート調査などを行いながらさまざまな意見を収集・分析し、課題に対する解決策を考え、発表するためのスキルを身に付けていった。

次に行われたのは地元魚沼の魅力や課題を掘り下げる「魚沼学」だ。最初に同校と協力体制にあり、スーパーグローバル大学でもある明治大学や国際大学の専門家や観光の実務家などを招いてさまざまなテーマで講演を行い、その後は「人口」「観光」「環境」「国際」「農業（産業）」「歴史」という6つのテーマ別のグループに分かれて学習を進めていった。「1年間の農業サイクルやタイ米

との違いなど、お米について調べている班が多かったですね。雪国ならではの家の造りや、市町村合併で何が変わり、何が問題として残ったかを調べている生徒たちもいました」と語るのは、英語科の神田貴代子先生だ。「クリティカルシンキングの一環で約35カ国から留学生が集う国際大学でアンケート調査をした際は、英語で積極的に話し掛ける生徒もいました。素直で物おじしないところは本校生徒の特長ですね」。SGH主任の馬場隆史先生もそう振り返る。

生徒の自発性を英語教育がリード

クリティカルシンキングやグループワークにおいて、同校の生徒が自主性や協調性を発揮しているのは、英語の授業で鍛えられてきた部分が大きいと玉木校長は指摘する。英語科の及川智弘先生によると、2013年度より学習指導要領が改訂され、アウトプット中心の授業内容にシフトしたという。「生徒には1年次から『間違ってもいいから積極的に話そう』と呼び掛けるとともに、読んだ内容を書き出し、音読するなど、『聞く・話す・読む・書く』の4技能を統合させる学習を進めてきました。教科書を使った授業でも、例えば水問題など、本文で紹介されているのはほんの一例にすぎません。生徒たちにはインターネットを使って別の水問題やその解決策を調べさせ、英語で発表させるなど、内容にシッ

かり向き合わせる工夫をしています」と、及川先生は説明する。

「英語で取り上げた話題が魚沼学で生き、魚沼学の話題がさらに英語にも…そんな相乗効果も感じます」と語るのは馬場先生だ。「SGHを始めた頃の生徒たちは『誰かがやるだろう』という雰囲気でしたが、今は一人一人が率先して動くようになり、共同作業などにも生徒の成長を感じます」

同校では、年度末の海外研修に参加するための基準を「英検準2級」としており、学年の8割の生徒がクリアしているという。学内全体の英検取得者の増加や3年生のセンター試験の成績を見ても、学習指導要領の成果が表れ始めていると言えそうだ。

自治体との連携や、 教職員の指導強化にも期待

生徒たちは1年次の終わりに3班に分かれてアメリカ、オーストラリア、タイへ海外研修に出掛け、自分たちがまとめた魚沼の魅力や課題を現地の学生に英語でプレゼンテーションする予定だ。2年次で英語の論文をまとめ、「魚沼学」の活動は終了。3年次には自分たちの成果を後輩に伝授するなど、学年を超えたピアサポートを行っていく計画もある。

学内にSGH推進委員会を設置し、他校の視察も活発に行いながらSGH

の取り組みを模索してきた1年目がもうすぐ終了する。「視察では都会や離島など、さまざまな例を見てきました。本校も雪国ならではのアイデンティティを育てつつ、自分とは違う他者を理解する人材を育てていきたい」と馬場先生。関口和之教頭も、「SGHを通じて南魚沼市の職員と話す機会が増え、市が移住促進や地域おこしなどさまざまな取り組みを行っていると知りました。今後は市と連携を強化するなど、この地域ならではの条件を最大限に活かしていきたい」と抱負を語る。

さらに「生徒たちは毎日、それぞれに自宅学習の記録を付けており、私も時々目を通し、コメントを書き入れています。今の1年生は日々の出来事の羅列にとどまらず自分の考えをしっかりと書いてくるので、読んでいて楽しいですね」。玉木校長が言葉を添える。そして、「本校には海外大学進学コースがあり、一方でSGHがあり、今はそれぞれ別に動いていますが、今後はそれらをうまく融合させていけたらと考えています。SGHは英語でのプレゼンテーションや論文をゴールとしていますが、英語科の先生だけではなく、課題の設定などに他の教科の先生方にも参加していただき、『こんな生徒を育てよう』という議論を活発に行うことによって、グローバル人材の育成が進むのではないかと思います」と締めくくった。



校長 玉木正己先生



教頭 関口和之先生



SGH主任 馬場隆史先生



英語科 及川智弘先生



クリティカルシンキングプログラムの最終発表



協力大学より講師を招き、魚沼学の講演会を開催

教育と研究の向上を追い求めるその先に 世界に通用する大学としての未来がある

広島大学 西谷 元 副学長（国際担当）

「教育力」と「研究力」の強化を軸に、グローバル人材の輩出と知の創造を目指す広島大学。スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）の公募では「世界をキャンパスとして展開する広島大学改革構想」が評価され、難関であるトップ型13大学の一角を勝ち取った。しかし、その基準となる「世界の大学ランキングトップ100」を本気で目指すには、小手先の施策だけでは不十分だ。グローバルな総合研究大学になるために広島大学が取り組む戦略とは。

ガバナンスの強化から始まる

大学改革

国際社会で活躍できる人材を育成するために、広島大学では教育力と研究力の強化が欠かせないと考えている。SGUの採択に先立つ約1年前、同学は文部科学省の平成25年度「研究大学強化促進（RU）事業」の支援対象機関に選ばれた。RUで研究力強化のための礎を得た同学は、SGUの採択が教育力を高めるチャンスと捉えている。大学の国際化は目的ではなく、あくまでも教育力を高めた結果としてグローバルに活躍できる人材を輩出できるとするのが広島大学の考えだ。では、そのための具体的な取り組みとしてどのようなものがあるのだろうか。副学長でグローバル化推進室長でもある西谷元教授はこう語る。

「世界トップ100に入るためには世界レベルの教育力と研究力が必要ですが、授業やコースの変更だけでは足りません。その根本となるガバナンスの強化が不可欠だと考えています。そこで私たちは本学独自の目的達成型重要業績指標『A-KPI』を設定しました。KPIは、企業で目標達成度合いを数値

化するための業績評価指標。それを大学に応用し、細かいデータを集めて分析することで大学の現状を把握するところから改革を始めました」

組織が変わらなければ

教育は変わらない

広島大学が構想の中でまず着手したのは、研究と教育の両面で最大の結果を出すための教員の適切な配置だ。学内のどの分野にどんな教員がいて、論文を何本出しているのか、どれだけの成果をもたらしているのかなど、細かいデータをすべてチェックする部門がある。それを踏まえたくうで教員人事を決定するのだという。

「例えば、『英語での授業をもっと増やしましょう』と呼びかけるだけでは何も変わりません。まずは根本となる教員人事から変える必要があります。英語での授業がなければ海外から留学生が集まらない。英語での授業を増やすためには英語ができる教員を雇わなければならない。そのためには教員人事から変えていかなければならない、という理屈です」

そうした改革の1つが、今年の4月

から始まる教員組織の一体化だ。従来の教員はそれぞれの研究科に所属していたが、全ての大学教員が所属する組織として「学術院」を創設し、教員は学術院に所属するとともに、研究科やセンターなどの教育研究組織に配属される。新たに教員を採用する際は、全て国際公募するという。

「学術院は専門分野で分類したユニットで構成され、現在、本学に在籍するフルタイム勤務の教員（約1,700人）がいくつかのユニットにグルーピングされます。このことにより、各専門分野の教員の状況を確認しながら、大学全体のバランスを考えて、学長の下に置く人事委員会が学長のリーダーシップの下で、全学的観点から戦略的な人員配置を行うことができます。こういう人事制度をつくるのは新しい学部を作るよりも大変ですが、いろいろなタイプの教員を招聘できるようにするはずだ」と西谷教授はこの新しい取り組みに期待を寄せる。

大学のパフォーマンスを把握する

モニタリング制度

適正な教員の配置と同時に、同学が力を入れるのが数値化によるモニタリ



グローバル化推進室長および国際センター長を兼任する西谷 元 副学長（国際担当）

ング制度の導入だ。一人の教員が担当する授業の単位数や受講人数といった授業に関するものや、論文数や外部資金の受け入れなどを細かくポイント化し、A-KPIに当てはめることで教員のパフォーマンスを正確に把握すると同時に、大学全体のパフォーマンスを把握し、数値目標も設定しやすくなるという。

「大学ランキングでも授業や論文の数を単純に数値化するだけではありません。研究や業績については、文系か理系か、どんな論文集に掲載されたかなど分野ごとの特徴を考えて補正をかけ、正確なデータを抽出します。データなしに政策を決定することはできませんから、ここが非常に重要になります」と西谷教授は説明する。

学生の国際流動性を高めるための

取り組み

もちろん広島大学が取り組んでいるのはガバナンスの強化だけではない。学生の海外留学を促進するなど国際流動性の高い教育システムの構築も重要な課題だ。

「学生の国際化の1つの取り組みが、短期の海外派遣プログラムです。これ

は海外経験の少ない学生を対象にした2週間程度の短い海外派遣で、新入生2,500人の約1割が対象です。魅力的なプログラムで学生を惹きつけ、競争率を高めることで優秀な学生を選び、海外に送り出します。今までに海外体験がほとんどない学生だけを対象にするというのがポイントです。帰国子女はもともと語学力があり、海外志向も強いので放っておいても語学は伸びていきます。それ以外の学生を対象にすることで学生全体の語学力の底上げするのが、このプログラムの目的です」と西谷教授は自信を見せる。

短期留学で徹底的に現地の言葉でのディスカッションをさせるなど、日本では経験できない濃密な体験が、その後の長期留学につながっていくのだという。事実、短期留学プログラムを経験した1年生が3年生になるときに長期留学を希望するなど、大学全体での留学希望者の数を飛躍的に伸ばすことに成功している。

学生に多様な成長のチャンスを与えたい

SGU採択を機に大きく変わったことの1つに、世界的研究大学コンソーシ

アム「SERU（Student Experience in the Research University）」への加盟がある。これは、教育の国際的な質の保証を目指す取り組みだ。

「SERUは、カリフォルニア大学バークレー校が中心となって運営するコンソーシアムで、アメリカを中心に世界の研究大学が加盟しています。加盟大学の学生がどんな勉強をして、どんな成果を上げているか、その意識や将来の計画などをアンケートで把握し、海外の加盟大学との比較・ベンチマーキングを通じて国際基準の中で広島大学の位置付けがわかります。ただ単に比べるだけでなく、互いにチェックし、レポートし合うことで本学の国際的な教育の質保証や質の向上に生かせると期待しています」

ガバナンスの強化による大学改革、各種プログラムの導入による教育改革、そして国際通用性の向上と、学内では様々な取り組みが進行中だが、それを包括的に進めていくのがグローバル化推進室の役割だ。

「1つ1つの取り組みはもちろん重要ですが、それをばらばらに進めても意味がありません。それぞれを全体の歯車の1つとして、優先順位をつけて取り組んでいきます。急に英語の授業を増やしても、それを受ける学生がいなければ絵に描いた餅に過ぎないからです」と西谷教授は強調する。「私たちは、学生にさまざまな「チャンス」を与えたいと考えています。ただ単にいろいろなプログラムをつくるだけでなく、学生が本当に育っていきけるような仕組みを準備した「チャンス」です。海外に行かなくても、広島で実現できることはいくつでもあります。そういう可能性を増やしていきたいですね」

SGU構想による改革の成果が表れ始めた広島大学。今後の動向に注目が集まっている。



Top Global University

スーパーグローバル大学（SGU）

大学の国際化が進めば
大学入試や高校教育も変わっていく

〔連載〕

思考力・判断力・表現力を育む

ライティング活動のために 第1回

Writing

2020年から次期学習指導要領の改訂や新テストの実施を控え、生徒が自分の言葉で自分の考えを発信する力を高める指導が求められています。4技能を統合した言語活動により、どのようにライティングへ結び付けるのか、また、生徒が書いたものをどのように評価すればよいのか。大井恭子先生が「効果的な指導と評価の方法」についてアドバイスを送ります。



2020年から実施予定の新テスト（大学入学希望者学力評価テスト〔仮称〕）を控え、4技能を統合しての英語指導が求められている。新テストだけでなく、2016年度からは英検2級においてもライティングが導入されることになった。いまや、こうした新しい流れの一番の特徴は「発信力」が求められていることである。高等学校の英語教師にとっては、ライティングやスピーキング等の発信力を高めるための指導は待ったなし、という状況にある。

しかし、「English compositionを教えずには」と大上段に構え、genre-approach^{*1}にするのか、process-approach^{*2}を取るのかと、右往左往することはない。もっと、ライティングを含めた発信活動を身近なものとして捉えてほしい、というのが本企画の趣旨である。

いきなりparagraph writingやessay writingに挑戦する前に、まず毎回の授業で、「自分の考えを発信する活動」を日常的に取り入れることから始めてみてはどうだろう。そのための1つの方策として「帯活動」の活用がある。

例えば、毎回授業の最初の5分間を生徒同士のSmall Talkの時間に充てる。その利点は、それまでの生徒たちのマインドを、日本語モードから英語モードに切り替える契機ともなり得るということである。トピックは教師が示す。月曜日であれば、「Talk about what you did last weekend.」のように、週末に近くなった

ら、「Ask your partner what they are going to do this weekend.」など身近な話題で互いに発信させる練習をする。または週の半ばであれば、学んだばかりの文法項目を取り入れたトピックも工夫できる。例えば、仮定法を学んだところであれば、「If you won the lottery and got a lot of money, how would you spend it?」というお題でクラスが盛り上がることは間違いない。こうしたSmall Talkの後に時間を取ることができれば、「Write down in your notebooks what you discussed with your partner.」という指示を出し、speakingからwritingへという2技能を統合した活動につなぐことができるだろう。

また、別の帯活動として、接続詞などのdiscourse markerを使った文を互いに書き、発表し合うという活動も面白い。「Speaking English is difficult for me, but _____」という文の下線部を記入させるdiscourse completion task^{*3}でも、butの代わりにsoだったらどうするか、「Speaking English is difficult for me because _____」となったらどうするか。このような活動は案外、思考力を要するものである。さらに、生徒がお互いに書いたものを発表し合うと、同じトピックで取り組んでいるにもかかわらず、partnerとの内容の違いに驚いたり学んだりもする。

このように発信力を高めるための指導を、身近なものとして授業に取り入れていただきたいと思う。

Key words

※1: genre-approach (ジャンル準拠指導法)とは…

ジャンル（日記、旅行記、科学レポート、意見文など）ごとに求められている特有の目的、文章構造、文法項目があるので、その特徴を、モデル文を通して学んだうえで、実際にライティングする方法。

※2: process-approach (プロセス・アプローチ)とは…

ライティングする際、「アイデアの発見」⇒「下書き」⇒「推敲」⇒「書き直し」という過程を一方通行で行うのではなく、何度も行きつ戻りつして仕上げる方法。

※3: discourse completion task (DCT: 文脈完成タスク)とは…

文脈の中でブランクになっているところを、文脈を踏まえたくらうで、それに即した自分の考えを生み出し補う作業のこと。一文のこともあれば、open-endedのものもある。



大井恭子 (おおい・きょうこ)

清泉女子大学文学部英語英文学科教授。東京大学文学部英語英文学科卒、New York州立大学Stony Brook校大学院言語学博士課程修了。博士（外国語教授法）。専門は英語教育、応用言語学。特にライティング能力の習得に関し、認知面と文化的背景という観点から外国語としての英語のライティング教育の構築を目指している。

〔連載〕

柴原智幸先生の

プレゼンテーション講座

第1回

「効果的に相手に伝えるための話し方」

自分の主張を

「文」にすることから始める

さて、今回のトピックは「効果的に相手に伝えるための話し方」です。

まずは、「日本語でコミュニケーションをする際、自分の主張を『文』にすることから始めてみてください。言い換えると、「自分の主張をきちんと相手に伝える必要性」を認識するところから始めると良いと思います。

なぜなら、大学で学生を指導しているときに、「相手に依存したコミュニケーションに慣れ過ぎている」ということをよく感じるからです。

「相手は自分を知っているし、自分も相手を知っている」という状態でのコミュニケーションにおいては、不完全なメッセージを発信しても、相手がそれを上手に穴埋めしてくれます。例えば「だりい」と言うだけで、「昨日は一緒にゲームをしたから、3時間しか

眠れていないんだよ。おまけにこの授業は苦手な教科だ。知ってるよな。だからあまりやる気が湧かないんだよ。早く終わらないかなあ」という心の中でのつぶやきを相手にくみ取ってもらえるわけです。

このような状態に慣れ過ぎると、ほとんど声に出してメッセージを発信していないということに気が付かずに、「何で伝わらないんだろう」と思ってしまうがちになります。英語でのコミュニケーションを円滑にしたいければ、まず、そのあたりの「姿勢から変える」必要があるのです。

もちろん、このようなコミュニケーションのあり方には、日本語という言語の持つ特徴からくる影響もあるでしょう。基本的に顔見知り同士の緊密なコミュニティで発達してきた日本語は、例えば「疲れたなあ」とつぶやく分には何の問題もありません。主語は分かり切っているので、言わなくてもよい…のではなく、不必要なものであってはいけません。「私が疲れたなあ」と言うと、また別の意味合いが生じてしまいますから。

日本語と英語のコミュニケーション方法の違いを理解する

私は以前在籍していた職場で「俺

に最後まで言わせるなよ。ちゃんと感じ取って動け」などと叱責されたものですが、「言わなくとも分かるだろう」というノリも、日本語でのコミュニケーションの場面ではよくあります。それに適応してしまっていることが、逆に英語を話す際の壁になってしまっているのです。

もちろん、日本語のコミュニケーション方法を一方的に批判しているわけではありません。ただ、日本語のコミュニケーションの方法論をそのままに、英語を話そうとするとうまくいかないことが、ご理解いただけるのではないのでしょうか。その点を生徒に伝えていくことが大事になります。

英語でのコミュニケーションでは、自分の主張を、知らない人に正しく理解してもらうために、まずはきちんと文で表現する必要があるでしょう。例えば、「だりい」ではなく、「私は疲れている」と文にしてみることで、英語でコミュニケーションする際の第一歩になります。そのような意識を持つことから始めてみてはいかがでしょうか。

そして、例えて言うと、「察しのあまり良くない人に、懇切丁寧に説明するつもりで」英語を組み立てていこうとすると、うまくいきやすいのではないかと思います。



柴原智幸 (しばはら・ともゆき)

神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師。同時通訳者。NHKラジオ『攻略!英語リスニング』講師。上智大学外国語学部英語学科卒。イギリス・バース大学の通訳翻訳コース修士課程修了後、ロンドンのBBCに入社。帰国後はNHKの放送通訳や「ディスカバリーチャンネル」などの吹き替え用映像翻訳、通訳養成学校での指導を行う。主な著書に『攻略!英語リスニング 徹底シャドウイングでマスター! 長文リスニング』(NHK出版)、『オバマの英語 徹底トレーニングブック』(アルク)など。

Game & Activity

授業開きの時期に役立つ アイスブレイク

希望に胸を膨らませて始まる新学期。子供たちは英語のクラスならずとも、どのクラスでも新しい環境になんだかソワソワしているはず。まずはこの1年間、子供たちが集中し、楽しく発話できるクラスづくりを目指して、「緊張せずに英語を話せる環境」をつくりましょう。心が閉じていたのでは、せっかくの英語も入ってきません。「間違ってもいい! 何でもいからとにかく言ってみよう!」という気になってもらう。第一歩を踏み出しやすくするための小学校向けのアイスブレイク・ゲームを紹介いたします。

MASUMI先生の紹介したゲームが見られます



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

1 みんなと Hi-Five!

授業のスタートでは、子供たちの緊張をほぐすためにも、まずは子供たちを動かしてしましましょう。大きな声で“Hi!”と言って、5人の友達とハイタッチ（英語ではHigh-five)をしたら、自分の席に戻ります。子供たちは友達より早く席に戻ろうと競い合いながら、夢中になって活動するでしょう。

呼びかけ例

Say “Hi!” to five people and sit down. Are you ready? Go!

子供たちを動かすことでクラスの空気が変わります。
また、少しでも相手に触れるということで、自然と相手に心を開くことができます。



2 Make a group of (人数)

子供たちは先生の指示した人数で集まり、グループができたらその場で座ります。そして、グループを組めなかった子供たち一人ずつに先生がインタビューします。英語を話すことに慣れていなくても、名前だったら言えますよね。そこで、まずは名前から尋ねます。活動を重ねるごとにこの質問を少しずつ変えていきます。子供たちが身近に感じられる質問を用意し、答えをあらかじめ練習しておくといいですね。

呼びかけ例

How old are you? / What is your favorite color?
What kind of food do you like? / What is your favorite snack?
What is your favorite TV program?

このゲームはどの年齢でも取り入れることができます。
空気がちょっと凍っているかな? と思った時に取り入れてみると、クラスの空気が変わります!



小口 真澄 (こぐち・ますみ)

“夢中になるから英語が話せる”英語芸術学校MARBLES主宰。聖セシリア女子中学校講師、新潟県魚沼市主催 魚沼産☆夢ひかり「キッズミュージカルプロジェクト」演出。全国の小学校にて英語劇ワークショップ「英語DEドラマ@学校」を行う。企業研修に英語劇を取り入れビジネスマンたちとも英語ミュージカルを創る。

3 いもむしゴロゴロ 切れたら負けよ!

2で作ったグループごとに、電車ごっこのように列を作って並びます。人数が多く、列が長ければ長いほど、難しさと楽しさが増すゲームです。列が途中で切れて崩れたグループは負けです。子供たちは最後まで途切れずに動作ができるように注意しながら、先生が指示した英語に従って動きます。

呼びかけ例

Run! / Walk! / Walk slowly! / Walk fast! / Jump!
Sit down! / Stand up! / Walk backwards! / Skip!

列が崩れていないかどうかを先生がチェックしたり、動作の指示が単調にならないようにしたりすると楽しめますよ。



Have fun!!

4 同じ考えの人み〜つけ!

3つの選択肢から自分の好きなものを選び、自分の考えと同じ人とグループを組みます。はっきり大きな声で言わないと、自分のグループを見つけれません。夢中で参加しているうちに自然と大きな声になります。

例A Potato chips / Ice cream / Chocolate

例B Spaghetti / Sandwich / Pizza

アクセントがどこにあるかに気付けて指導しましょう。同じものを選んでグループになった子供たちには、そらって選んだ単語を言ってもらいます。3つのグループができるはずですが、時々同じもののグループが2つできていることもあります。同じグループができないようにすることを伝えと、子供たちはさらに必死になります。また、時間制限を設けると、より自分のグループを見つけるのにより必死になることでしょう。



ふるさとに誇りを持ち、 自分を発信できる力を養い、 グローバル社会をたくましく生き抜く 子どもを育てたい

第6回 秋田県教育委員会 米田 進 教育長

文部科学省が小学6年生と中学3年生を対象に実施している「全国学力・学習状況調査（学力調査）」において、高い正答率を誇り、学力日本一として注目される秋田県。児童・生徒の学力向上、英語力向上のために、どのような施策に取り組んでいるのか。グローバル化を見据えて、秋田県の教育が目指す姿について、秋田県教育委員会の米田進教育長にお話を伺った。（文中敬称略）



ふるさと教育の大切さと 「『問い』を発する子ども」の育成」 に重点

秋田県が全国一の学力を生み出している背景を教えてください。

米田 要因は4つあります。1つ目は、各学校で校長先生や教頭先生を中心として、先生方がチームとして授業改善に取り組んでいること。2つ目は、家庭と地域の理解や支援、協力があること。3つ目は、市町村の教育委員会と県の教育委員会、あるいは、市町村教育委員会と大学等の高等教育機関との連携ができてきていること。そして4つ目は、県の教育行政面での施策にあります。まず、秋田県の先生方は授業をどのように改善すべきか、子どもたちの生活指導をどうするかなどを、若手からベテランまでみんなで相談し、話し合いながら1つの組織として、力を発揮しています。また、家庭の協力なくして、子ど

もたちの生活習慣は身に付きません。挨拶をはじめとする基本的な指導が家庭でしっかりとなされていると思います。さらに、学力調査の結果の分析やその後の指導については、大学の先生にご協力いただいています。そして、学力調査が始まる以前から秋田県では県独自の学習状況調査を小学4年生から中学2年生まで各教科で行い、十分に身に付いていないところを次の指導に生かすといったことを続けてきました。学力調査と県の学習状況調査、高校入試の3つを大きなサイクルとして捉え、途中経過を見ながら次を検証しては改善するというサイクルを持っていることが、子どもたちの学力向上に結び付いているのだと思います。

では、秋田県が教育を通じて育てたい子どもたちの姿とは？

米田 秋田県では2014年4月に、教育・人づくりを重点戦略の1つとして位置

付けた「第2期ふるさと秋田元気創造プラン」をスタートさせ、県教育委員会はそれを受けて「第2期あきたの教育振興に関する基本計画」を策定しました。この計画において、「ふるさとを愛し、社会を支える自覚と高い志にあふれる人づくり」を目指す姿として打ち出しています。秋田で生まれ育った子どもたちが、一人の社会人として、あるいは市民として自ら自分たちの社会を支えていこうという意識を育てたいという思いを込めたものです。また、その一方で、志を高く持つことによって自身を奮起させ、より高いものに向かっていこうとすることが1つの力となり、自らががんばる子どもたちになってほしいと考えています。

具体的には、どのような教育活動を行っているのでしょうか。

米田 県教育委員会では毎年、「学校教育の指針」を示しています。そのなかで、長年にわたって掲げている目標が

「豊かな人間性を育む学校教育」です。そして、この目標を実現すべく「思いやりの心を育てる」「心と体を鍛える」「基礎学力の向上を図る」「教師の力量を高める」という4つの柱に基づいて、学校教育の充実を図り、さまざまな教育活動を行っています。特色ある取り組みとしては、「ふるさと教育」と「『問い』を発する子ども」の育成が挙げられます。まず、「ふるさと教育」においては、自分が生まれ育った地域の自然や文化、あるいは歴史に早くからできるだけ多く触れさせたり、地域の活性化に貢献する活動をさせたりすることで、自分のふるさとに誇りを持ち、将来はふるさとのためにがんばろうとする姿勢を育てています。次に、「『問い』を発する子ども」の育成についてですが、課題解決型の授業を取り入れ、誰か一人が問いを発することによって、周りの子どもたちの学びの幅が広がり、深まることにつながるから、積極的に発言し、みんなで学び合い、ク

ラスに貢献しようと思えるような子どもを育てることを目指しています。

学習指導要領でも示されている「言語活動の充実」につながる取り組みになるのでしょうか。

米田 これまで秋田県では「読んで考えて表現する」といったプロセスを重視した学習活動を展開してきました。国語科をはじめ各教科では「思考力・判断力・表現力」を育むため、授業で「問い」を発する場面や活動を意図的・計画的に設定し、子どもたちが主体的に課題を解決するための言語活動に取り組み、そのなかで考え出された解決策を発表するという活動を取り入れています。そうして、「問い」を発するうえでの基盤となる言語活動を推進し、同時に言語能力も高めていきます。グローバル時代を迎え、これからは、いろいろな場面で自分の意見を積極的に言えるようであればなりません。沈黙は

金なりではないのです。日本人同士ではお互いが察するというコミュニケーションが成立することもあります。それが異文化の人とのコミュニケーションの場合、自分を発信することができなければ、相手と理解し合うこともできません。ですから、授業を通して、そのような「『問い』を発する子ども」の育成を最重点課題と捉え、グローバル社会をたくましく生き抜く力を身に付けさせたいと取り組んでいるのです。

英語力“日本一”を目指して

英語教育については、どのような特色がありますか。

米田 「第2期あきたの教育振興に関する基本計画」において、「グローバル社会で活躍できる人材の育成」を重点の1つとして捉え、「英語コミュニケーション能力“日本一”」を目標に掲げました。そして、目標達成のための具体的な取り組み

として、2012年度から6カ年計画で年次進行してきた「あきた発！英語コミュニケーション能力育成事業」をさらに充実させています。この事業は大きく3つの柱で成り立ちます。【1】小中高授業改善推進事業【2】教員の授業力向上推進事業【3】英語を学ぶ環境整備——です。各事業の内容は下の通りです。

具体的にどのような内容なのでしょう。

米田 【1】-1については、まず、県としてCAN-DOリスト形式のモデルを作成し、中・高等学校各校で生徒の実態を見ながら、「～ができるようになる」という到達目標を示し、生徒が身に付けるべき能力を明確化するとともに、指導と評価の改善を推進しています。

【1】-2については、2013年よりALTを7名増員し、現在県内の高等学校には

25名のALTが配置され、ALT一人あたりの平均担当数は2校となりました。ALTと日本人英語教師とのチームティーチングを通して、生徒のコミュニケーション能力の育成や国際教育の推進に努めています。また、ALTは授業に限らず、スピーキングテストや、【3】-5のイングリッシュキャンプ等での指導など、教育活動を充実させる役割を担っています。

【1】-3については、県内の中学3年生全員に年1回、実用英語技能検定(英検)4級以上の受験料を補助しています。本県では、英検は4技能を測ることができ、生徒が目標を持って学習に取り組み、意欲を高めるのに効果的な試験であると評価しております。2016年度からは中学3年生で受験した生徒たちのその後の英語力の伸長度を把握するために、高校2年生での受験料

補助の制度も導入することにしました。

【2】-1については国際教養大学(AIU)の協力のもと、小学校の外国語活動でリーダー的存在となる教員を育成するため、夏季休業中の5日間、集中研修を行い、外国語活動の指導法及び英語コミュニケーション能力の向上を図っています。さらに、【2】-2により、文部科学省の中央研修を受講した「英語教育推進リーダー」を講師とした研修を実施し、本県の小学校外国語活動の中核となる教員および中・高等学校の英語担当教員の指導力向上を図っています。

【3】のうち特徴的な事業としては、【3】-5の小学5年生～高校3年生を対象とする2泊3日のイングリッシュキャンプ(13回)と、英検準2級程度以上の中学1年生～高校3年生を対象とする3泊4日のスーパーイングリッシュキャンプ(13回)があります。いずれも、ALTなどと交流をしながら、英語によるさまざまな活動に親しみ、英語への興味関心を高めています。

その他、2015年度には秋田県立秋田南高等学校がSGHの指定を受け、現在、「『こまちの里』秋田の高校生が『地球村』の食糧問題に挑む!」という構想のもとで、地域の課題をグローバルな課題と結び付けながら、国内外での探究型のフィールドワークを通じて解決していこうとする姿勢を育成しています。そして、グローバルリーダーとして不可欠な「課題設定能力」「課題探究能力」「論理的思考力」「プレゼンテーション能力」「実践力」の5つの能力の習得に取り組んでいます。

教員自身も学び続ける姿勢を

このような事業に取り組むうえで重視しているのは?

米田 グローバル人材の育成が求められていますが、英語教育に関して言えば、学校で重視するのは、まず生徒たちが将来社会に出たときに必要とされる

英語力の基礎を築くことです。生徒一人一人の学習意欲をいかに引き出すのか、その動機付けが大切であり、生徒のやる気を引き出す教員をいかに育てるかということが重要だと言えます。昨今では“生の英語”に触れる機会は、テレビやラジオ、インターネットなど、いろいろあります。そうした生の英語や生きた情報を授業でも題材として扱うなど、うまく活用すれば、生徒の語彙力や表現力を磨くことができるでしょう。そして、英語は世界の共通語であり、それぞれの国で話される英語があります。そこで、授業などを通じて、生徒に欧米の標準的な英語だけでなく、できるだけいろいろな国で話されている英語に触れさせることも必要でしょう。いろいろな英語を聞ける力を身に付けることは、これからのグローバル社会において大切だと思います。教員のみならずには、英語を通じて、生徒が心豊かになること、さらに、心の窓を外に向けて開き、外の世界を眺めて出て行こうとする力を育てていただきたいものです。

秋田県として育てたいグローバル人材像とは?

米田 秋田から県外や海外へ出て、ふるさとを忘れず、誇りに思える生徒を育てていきたいと考えています。英語を

通して相手とのコミュニケーションを図り、相手の文化を理解し、受け入れると同時に、自分や自分の国の文化についても深い理解を持ち、発信できなければなりません。世界と向き合えば必ず、自分や日本と向き合うことになり、日本人としてのアイデンティティを意識することになるでしょう。だからこそ、秋田の子どもたちには、自分が生まれ育ったふるさとへの理解を深め、発信できる人であってほしいと願います。ふるさと教育を大切にしているのはそうした背景があります。また、商談などにおける会話はお互いの共通言語があるので通じ合えますが、実際に社会に出て直面する課題は、ビジネス以外の場面で、語れる内容を持っていないという問題です。そうしたとき、リベラルアーツ(教養)を学び、身に付けることがいかに大切かを実感すると思います。だからこそ、中学・高等学校の段階から、英語や外国のことを学ぶと同時に、日本の文化についてできるだけ学んでおきたいものです。

社会の変化とそれに伴い英語教育も今、大きく変化しています。そのような状況を受けて、教員に求められる姿勢とは何でしょうか。最後に、教育界・秋田から、メッセージをお願いします。

米田 めまぐるしく世の中が変わり、英語

教育も今は過渡期にあります。特に、次の学習指導要領では、小学校中学年での外国語活動の導入や高学年での英語教科化という大きな変化に注目が集まっています。小学校の先生はもちろん、中学校や高等学校の英語教員のみならずにもお伝えしたいのは、生徒に英語を教えるだけでなく、自身が英語を学び続ける姿勢を忘れずにいていただきたいということです。学ぶのに遅すぎるといってはなりません。自ら学ぶ姿勢を持ち、そうして学んだことを子どもたちに還元していただけたらと思います。教員は生徒にとって身近なロールモデルです。教員が学ぶ姿勢を子どもたちに見せることは、何よりの動機付けとなるでしょう。そして大切なのは、「学び続けること」です。今、自分には何ができるのか、そしてどのくらいできるのかということ把握し、さらに自分を高めていくために、目標を高く持ち、到達できたらさらに上を目指すというように、学び続けていただけたらと思います。社会の変化に伴い、価値観も変化し、夢や希望を語るのが難しい時代にはなっていますが、自ら「問い」を見つけて学びを広げ、深め、目標を達成していくことで味わえる満足感。そして、開けていく未来。夢や希望を持って、がんばり続けていくことの大切さを子どもたちにぜひ見せてほしいと思います。

ふるさとを誇りに思い、教養を身に付けた心豊かな子どもたちを育てていきたい。

〈米田教育長〉



実用英語技能検定（英検）を 2016年度第1回検定よりリニューアル！

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は、実用英語技能検定（英検）の全級4技能化に向け、
合否判定方法や問題形式のリニューアルを進めています。

その取り組みの一環として、2016年度第1回検定において、2級に「ライティング」、
4級と5級に「スピーキング」テストを導入することになりました。

変更点 1 合否判定（対象：全級）

全級において、一次試験、二次試験ともに「CSE 2.0^{*}」に基づいて算出した技能別スコアにより、
合否を判定します。個人成績表（一次試験、二次試験）および合格証明書・合格証書には、合否に加えて
英検 CSE スコアを新たに記載。高校入試や大学入試での活用をはじめ、技能別の伸長度の確認や苦
手分野の把握にもお役に立ていただけます。

※ <https://www.eiken.or.jp/cse>

個人成績表（一次試験）【見本】



合格証明書・合格証書【見本】

変更点 2 ライティングテストの導入（対象：2級）

4技能化の取り組みとして、2級にライティングテストを導入します。学習指導要領の内容と国際標準
規格であるCEFRのB1レベルと一致する試験内容とします。日頃の生活や学習を通じて身に付けた知
識の活用を求め、受験者は与えられたトピックに対して、意見とその裏付けとなる理由を適切な語彙と
文法を使用しながら英文で論述する能力が試されます。

なお、1級、準1級、2級の各級共通で「内容」「構成」「語彙」「文法」の4つの観点に基づく「観点
別採点」を導入し、より詳細なフィードバックを行います。具体的には以下の通りです。

4つの観点

内容	課題で求められている内容が含まれているか
構成	英文の構成や流れが分かりやすく論理的であるか
語彙	課題に相応しい語彙を正しく使えているか
文法	文構造のバリエーションやそれらを正しく使えているか

変更点 3 スピーキングテストの導入（対象：4級、5級）

これまでリーディングとリスニ
ングのみの2技能だった4級と5
級においても、4技能化を見据え
て、スピーキングテストを導入して
3技能とします。ただし、初めて英
語に触れる受験者が多い4級と
5級の級認定については、従来通
りに一次試験（リーディングとリス
ニング）の結果のみで判定し、
その合否に関係なく、申込者全
員にスピーキングテストの受験機
会をご提供します。
3級以上のスピーキングテストと
の相違点は右の通りです。

	1級～3級	4級・5級
受験対象	一次試験の合格者のみ 二次試験に進出	一次試験の申込者全員（原則）
受験方式	面接委員との対面式	録音形式（パソコン、スマートフォン、タブレット などのコンピュータ端末）
受験会場	協会が指定する会場	自宅、学校等インターネット環境の整った場所 ならどこでも受験可能
受験日 （受験期間）	年3回（協会指定日）	個人受験、団体受験ともに随時可能（原則1年 以内）
級認定	一次と二次の両方に合 格した受験者に与えら れる	一次試験（リーディング、リスニング）の結果の みで判定。スピーキングテストは級認定とは別に 「4級（5級）スピーキングテスト合格」として判定
成績結果の 提供方法	ウェブサイトでの閲覧 および郵送により提供	ウェブサイトでの閲覧（ダウンロード可能）
成績表の 内容	合否／英検 CSE スコ ア／英検バンド	合否（スピーキングのみ）／英検 CSE スコア／ 英検バンド

変更点 4 問題形式（対象：3級以外の各級）

3級を除く各級（1級、準1級、2級、準2級、4級、5級）において、以下の通り、問題形式を変更します。

級	テスト	変更ポイント	詳細
1級	ライティング	・問題形式の変更 ・観点別評価の採用	CEFRのC1レベルとの整合性をより高いものにするため、社会性の高い話題 について、自分で考えをまとめ、理由とともに意見をまとめるエッセイ形式に。
準1級	ライティング	・問題形式の変更 ・観点別評価の採用	CEFRのB2レベルとの整合性をより高いものにするため、これまでのEメール 形式からエッセイ形式に。
2級	ライティング	・ライティングテストの導入 ・観点別評価の採用	CEFRのB1レベルのエッセイ形式を導入。
	リーディング	・一部問題形式の変更 ・リーディング問題数の変更	ライティングテストの導入に伴い、語句整理問題を削除。長文の空所補充問 題において、1級・準1級のように、空所にあてはまるものを複数の語句からな る選択肢から選ぶ形式とし、文脈を読み取る力をより精度高く評価。問題数 を8問から6問に削減。
準2級	リーディング	・一部問題形式の変更 ・リーディング問題数の変更	長文の空所補充問題において、1級・準1級のように、空所にあてはまるもの を複数の語句からなる選択肢から選ぶ形式とし、文脈を読み取る力をより精 度高く評価。会話文の文空所補充の問題数を8問から5問に削減し、全体 の問題数のバランスを調整。
4級・ 5級	スピーキング	・スピーキングテストの導入	一次試験の合否に関係なく、申込者全員に受験機会をご提供。コンピュータ 端末を活用した録音形式で実施。受験日の指定はなく、1年間有効。級認定 は一次試験の合否のみで判定。スピーキングテストの結果は、級認定とは別に 「4級（5級）スピーキングテスト合格」として判定。

変更点 5 試験時間（対象：2級）

2級のライティングテスト導入に伴い、筆記試験の解答時間を現状の75分から10分延長し、85分といたし
ます。2級以外の級は変更ありません。

変わる英語教育。 中学校教員に求められる役割とは

全国英語教育研究団体連合会（全英連）は、各都道府県や地域ブロックの中学校、高等学校の英語教育研究会を統括する団体だ。全国の中学校や高等学校の英語科教員およそ6万人が加盟している。

全英連における中学部会とはどのような役割を果たしているのか、また、小・中・高の接続を踏まえ、中学校ではどのように生徒の英語力を育成していけばよいのか。全英連の惣田修一副会長・中学部会長（練馬区立大泉中学校長）にお話を伺った。



10年前に発足した中学部会

全英連は1950年12月10日に結成され、中学校と高等学校が同じ組織のなかで活動してきました。東京都の場合は、高等学校の方が全英連での活動が盛んで、中学校の英語科教員は東京都中学校英語教育研究会（都中英）での活動が中心となっていました。また、1982年には全国公立中学校英語教育研究団体連合協議会（全中英協）が発足し、年1回の全国理事会を開催して、全国の中学校の英語教育研究会代表者が情報交換をし合う場が設けられていました。つまり、中学校については全英連と全中英協という2つの組織が並立してきたのです。

しかしその後、全英連における中学校の活動の改善を図るという趣旨のもと、全英連における中学校の位置付けを明確化していくという要望もあり、全中英協を発展解消して、中学校としての一本化した全国組織を確立することになりました。こうして2006年に、全英連における中学部会が発足したのです。

全国の中学校の英語科教員をサポート

中学部会の事業としては高校部会と同様に、研究部、調査部、事業部の部門別に活動を行っています。研究部や調査部では、全国の中学校の英語科教員を対象に英語教育の現状の調査・分析を

行っています。CAN-DOリストの作成状況やALTの活用、評価のあり方などの課題を共有し、解決に向けて取り組むことを目指しています。事業部は、文部科学省の教科調査官や大学の英語教育関係者を講師に招き、講演会を開催しています。この講演会は毎回、中学校の英語科教員が「国が進めている英語教育改革の動向と課題」などについて学ぶ機会となっています。また、年1回全国理事会が開催され、全国の中学校における英語教育についての情報共有・交換を行うほか、全国の中学校の英語科教員の研究活動を支え、全英連大会での運営サポートにも取り組んでいます。

昨今、全英連に加盟する先生方の世代交代が進んでいます。若い世代に向けて、全英連の長い歴史と伝統を受け継ぎながらも、新たな時代の教育も踏まえた、全英連としての“スタンダード”となる英語教育のかたちを示していけるような組織でありたいと考えています。また、全英連大会は7年に1回東京で開催されますが、各地域ブロックでの大会開催とは違った、国際都市東京への期待の高さを肌で感じていますので、東京大会がその後の7年間にわたる英語教育のモデルとなりうるようなレベルの授業を実演できるよう、教員の指導力向上にも寄与してまいりたいと思います。

生徒に夢を与え、英語への興味関心を高める指導を

2020年には次期学習指導要領が実施されるにあたり、今後さらに、英語科教員には授業改善への取り組みが求められるでしょう。なかでも、CAN-DOリストに基づいた授業づくりの視点を持つことは大切です。授業を通じて生徒が何をできるようになったのか。それを生徒自身が実感できるような指導をしていかなければなりません。また、そうした「技能の育成」とともに、生徒の「外国に対する興味関心を高めていく指導」をバランス良く行い、将来、生徒が世界を舞台に活躍できる人材になれるように育てていくことも大切です。

英語科教員として、授業を通じて生徒に夢を与え、「外国に行つて外国の人と話してみたい」「将来は海外で暮らしてみたい」「英語を使って仕事がしたい」「字幕なしで映画を見たい」といった、さまざまな希望をかなえていけるような指導をすること。それがグローバル人材の育成へとつながっていくのではないのでしょうか。

そのためには、授業で生徒が英語を使って活動をする場面を増やしていく必要があります。中学校でも次の学習指導要領では「英語で授業を行うことを基本とする」と示されています。中学校の先生方には、自身の英語力も高めるとともに、さまざまな授業を見て研鑽を積んでいただき、より良い授業をつくっていただきたいと思います。

小学校の外国語活動への理解を深める

小学校の外国語活動が導入される以前は、中学校が英語教育のスタートラインでしたから、中学校の英語科教員は生徒の英語の基礎力をつけ、高等学校へ送り出すという視点しか持っていませんでした。リレーに例えれば、トラックを3周して、バトンを渡せばよかったのです。しかし、今は違います。すでに小学校で外国語活動を最低でも2年間、地域によってはもっと長く行っていますから、トラックを2周以上走ってきた生徒を受け入れ、そこからさらに3周走らせ、バトンを高等学校へ渡すという役割を中学校は担っているのです。だからこそ、中学校の教員は小学校の外国語活動の内容を知るべきであり、どのように走ってきた（英語を使ってきた）生徒たちであるかを把握する必要があります。

各地で小・中連携は進んでいますが、その意味は今後ますます大きくなるでしょう。小学校の公開授業を中学校の教員が見て、実際の活動内容や児童の様子を把握し、小学校の教員にアドバイスをしたり、小・中をつなぐ授業内容を一緒に考えたりすることもしていくと良いでしょう。次の学習指導要領では、中

学年での外国語活動の導入、そして高学年での教科化が示されています。教科として英語に触れてきた生徒をどのように受け入れるのか。ますます小・中連携の重要性が高まるに違いありません。

もちろん、これまで同様に高等学校への受け渡しもありますから、自分の学校の生徒が3年間の学びを経て、どのような英語力を身に付けて巣立っていくのかをイメージし、CAN-DOリストに基づいた学習到達目標を設定したうえで、日々の指導にあたっていただきたいと思います。

新しい英語教育のモデルを示す全英連大会

これからのグローバル時代を生きていく生徒たちにとって必要な力とは、「交渉力」だと思います。英語で相手の話を聞き入れた上で、自分の主張を相手にしっかりと伝え理解されること。そのようなコミュニケーションができる力を、いかに授業での活動を通じて身に付けさせることができるか。そのためには、生徒の発達段階に応じて興味関心のある題材を選び、生徒が英語を使って発表・討論・交渉するといった言語活動を豊富に体験させたいものです。そうして生徒に英語を使って相手と理解し合えた喜びを体感させられれば、生徒の英語を学ぼうとする意欲は高まっていくでしょう。

現在、日本の英語教育は大きな過渡期にあります。全英連としては、全国の英語科教員に向けて、より良い英語の授業のモデルを示していきたいと考えています。その1つの機会が、全英連大会です。開催地の小・中・高等学校で授業改善に取り組む先生方の授業実演を見ることができ、自身の所属とは違う校種の授業も見られる貴重な機会だと言えます。今年は11月11～12日に山口大会が開催されます。山口県中学校英語教育研究会（中英研）が中心となって、教員たちの英語教育にかける熱い思いを組織力に代えて、大会を成功させようという準備を進めているようです。本部としても、大会運営に関わる先生方をサポートしてまいりたいと思います。どうぞご期待ください。

英語教育シンポジウム ～日本の英語教育が変わる時～ を開催

日本の英語教育が大きな変革期にある現在、公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）主催の「英語教育シンポジウム～日本の英語教育が変わる時～」が、2月14日に大阪市内で開催された。官学の関係者が英語教育改革の方向性や展望を語るとあって、参加希望者が多く、早くから定員に達し、期待の高さをうかがわせた。当日はあいにくの空模様となったが、多数の教職員や英語教育関係者が詰め掛け、スピーカーやパネリストの解説、主張に熱心に耳を傾けていた。

入試と教育を同時に変える大変革 英語教育にとって大きなチャンス

まず登壇した、文部科学省大臣官房審議官（高大接続・初等教育局担当）伯井美徳氏は、『「真の学ぶ力」を育成するための教育改革～『高大接続改革の方向性について』を中心に～』と題して、現在進行中の高大接続改革の動向を解説した。

特に教職員が注視する「学習指導要領改訂に関わる議論に関するこれまでの経過と今後のスケジュール」について、2014年11月の中央教育審議会総会から2016年度内に予定される中央教育審議会としての答申まで、そして2020年に向けてのビジョンを参加者と共有した。伯井氏は特に「現在は“入試と教育を同時に変える”という、大きな変革期にある。この機を英語教育の大きなチャンスと捉えたい」と力説した。また、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問（2014年11月）の概要について、その「審議事項の柱」の中でも英語教育に関する事項を説明。「以前より指摘されていたことだが、日本の英語力は世界的に見ると下位であろう」と伯井氏。英語4技能はどれも十分に定着してお

らず、アクティブ・ラーニングなどの新しい学習・指導法の導入などの抜本的改革が必要と判断され、学習指導要領の改訂に大きく反映される、ということだ。さらに「これからの教育課程の理念」について、“社会に開かれた教育課程”をもとに、育成すべき資質・能力をカリキュラム・デザインし、全面的な改革を行っていることに理解を求めた。

そして、近い将来は「カリキュラム・マネジメント」が重視されることに言及。教育内容と指導體制を考え合わせながら、「学校としてしっかりマネジメントしていくことが要求されることになる」と述べた。伯井氏は何度も「理念や向かうべき方向は決まっているが、各論は進行中で断定したお話ができない」と詫言ながらも、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」での“民間の知見の活用”や、「小・中・高等学校を通じた英語教育強化」における“英語教育の抜本的強化のイメージ”まで講じた。

授業で先生が英語を使い 生徒と英語で話すことが最重要

続いて、上智大学言語研究センター長の吉田研作特別招聘教授が、「これからの英語教育の方向性と大学入試改

革」について語った。まず、文部科学省が2013年に発表した『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』ではアクティブ・ラーニングが重視されており、吉田特別招聘教授は基礎力・思考力・実践力の「21世紀型能力」の育成への期待を説明。次に「日本人の英語力と内向きの日本人 外国語に対する自信のなさ」というテーマの中で、特に“英語のOwnership”を強調した。また、non-nativeの英語を聞く機会の多い生徒は、non-nativeの英語に対するpositive attitudeを持つようになり、自らが話す英語にも自信を持つようになる、という研究から得られた結果を紹介し、これは「英語教師にも当てはまるだろう」と吉田教授は述べた。日本人から見ればアメリカ人やイギリス人、インド人が使う英語は“THEIR ENGLISH”であり、日本人が使う英語は日本人の“MY ENGLISH”であり、国際共通語と



特定非営利活動法人教育支援協会
吉田博彦代表理事

文部科学省大臣官房審議官
(高大接続・初等教育局担当)
伯井美徳氏

早稲田大学 文学学術院
安藤文人教授

大阪府教育センターカリキュラム開発部
蛭田勲部長

英検協会教育事業部
塩崎修健部長

しての英語は“OUR ENGLISH”である、という認識を持つことの重要性を伝えた。そのうえで、授業で先生がOUR ENGLISHを話している姿や、英語でコミュニケーションしている姿を生徒に見せることが大事であり、「生徒と一緒に英語でディスカッションしよう」という姿勢が重要であると熱く語った。さらに、「国際共通語としての英語の最終的到達目標としてのCAN-DOリスト」についてや、文部科学省において議論が続いている「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」での英語4技能の評価法の模索についてまで、多岐にわたって論じた。

英語を「使うこと」を前提に学ぶ 学生を増やし、育成するために

その後、早稲田大学文学学術院の安藤文人教授が、「大学が考える英語4技能化と入試改革—早稲田大学文化構想学部・文学部の場合—」の論題で講演した。2004年度、早稲田大学文化構想学部・文学部では“英語カリキュラムの全面的な改編”を行い、それまでは技能別科目に分けていた英語を「目的別科目（4技能統合型）」とし、「教授言語はすべて英語」へ。安藤教授は「重要なのは“英語で教える”こと



です」と、教育関係者を前に何度も語りかけた。そして、2017年度入試から導入される「“英語4技能テスト利用型”一般入試」に至るプロセスを説明した。さらに、2017年度以降の改革についても、早稲田大学の強みである「日本文化を英語で学び発信できる能力の育成」や「広領域科目を英語で単位取得できる環境整備」など、近い将来のビジョンを明示した。

「CAN-DOリスト」作成の効果から 検定の進化まで、興味深い討論

プログラム終盤のパネルディスカッションは、特定非営利活動法人教育支援協会の吉田博彦代表理事をモデレーターに迎え、伯井美徳氏、安藤文人教授をはじめ、大阪府教育センターカリキュラム開発部の蛭田勲部長、英検協会教育事業部の塩崎修健部長の4名がパネリストとして登壇した。

パネルディスカッションは会場の参加者から寄せられた質問をいくつかの議題にまとめ、それにパネリストが回答する形で進行した。大阪会場での開催であることから、蛭田部長は大阪を含む関西の英語教育・カリキュラム改革の現状を伝えた。そして、「入試改革に向けて、授業ではどのような対応をしていくのか」について、先生が「英語で授業を行うこと」についての高い効果などを踏まえ、「CAN-DOリスト」作成の重要性を力説した。また、伯井氏の「カリキュラム・デザインの方向性」や、安藤教授の「高大連携の考え方」は、参加者や登壇者の関心を集めていた。さらに、塩崎部長はパネリストたちから質問された「民間の英語検定試験が入試にどのように対応し、今後どう進化していくのか」の内容に回答する形で、実用英語技能検定（英検）が教育現場で高い評価を受けている点と、入試改革に向けて4技能化を進めていることを説いた。

パネルディスカッション終了後は、情報交換会が行われた。参加者からは「非常に実りの多いシンポジウムだった」という声が相次ぎ、参加者たちは「今回で得たことを、明日からの英語教育に生かしたい」と目を輝かせて会場をあとにした。

帰国後の取り組み報告

REPORT

中学校英語教員研修

モンタナで学んだアクティブ・ラーニングを日本の教室で

米国
モンタナ州立大学

大阪府泉大津市立小津中学校 教諭 森田 有加里



課題

「授業中に生徒が英語を使っている時間は…数えたくない!」

「授業の中で、どのようにして自由に自分の意見を話す練習をさせられるか」これが私のテーマでした。モンタナ研修中、「授業中に生徒が英語を使っている時間はどれくらい?」と聞かれ、ハッとしました。正直、数えたくない…と思ったのを覚えています。50分の授業のうち、どうしても講義形式の時間が長くなりがちで、文法理解は深まっても、それを自然な場面の中で活用させることは不十分でした。生徒が英語を使う時間が短く、活動を入れるのは時間に余裕のある時だけ。英語を使って活動することを中心とした授業が組み立てられていませんでした。また活用させる時間を生み出すにも、教科書の内容量の多さに諦めてしまうことが多かったのです。

帰国後の変化

「コミュニケーションの場面を毎授業の中に!」

英語を学ぶ意義や楽しみはコミュニケーションにある!!と、研修を経て一層感じるようになりました。それを実感させるため Rotating Speaking[※]などを用い、毎時間ペアで英語を話す機会を設けています。なるべく、生徒たちが話したくなるようなテーマを考え、最初は30秒間トークから徐々に45秒、1分と伸ばしています。生徒が4技能のいずれかを常に英語で行っていることを目標に授業づくりをしています。

※2本の列をつくり、向かい合った相手とペアで、与えられたトピックについて簡単な会話をする。その後全員が右へ一歩動くことによりペアを組み替え、同じトピックについて話す活動

変化1

100%Participationをめざして

100%の生徒が参加している状況を作る。参加している生徒としていない生徒がいる状況はもったいない。例えば、教師が全体に「How do you spend your weekends?」と尋ねた時、答える生徒は約1/35人(3%)。それをペアでするとどうか? 50%が尋ね、50%が答え、会話に100%の生徒が参加する。全員に役割を与えると、全員が自らの活動を通して学ぶことができる。研修で学んだトランプを使ってのグループ分けや役割決めで、全員に役割を与えている。ペアやグループの活動が増えたことで、生徒一人一人に責任感も芽生えてきたように思う。

変化2

Shareの時間でさらに深める

人と意見をshareすることで自分の意見が深まっていくことを、研修で体験。そこで、プレゼンテーションや音読テストなどの活動後、「どの点が良かった?」「改善できる点は?」と、自身や他者の発表を振り返る機会を設けるようにした。その際必ず「なぜそう思うの?」と聞き返し、深める。これによってコミュニケーションの機会が増え、次回の活動の質を上げることもつながる。自由に意見を言い合う練習を重ね、ディベートでも自信を持って考えを述べられるようにしたい。

変化3

ALTと行う国際の授業を一新!

本市の中学1、2年生が週1回受けているALTによる国際の授業。この授業こそActive Learningの実践の場だと考え、ALTと授業デザインを一新した。Warm-upとして Rotating SpeakingやGuessing Gameを取り入れ、あとはターゲットとなる文法を考慮したグループワークにつなげている。限られた語彙力の中学1年生に、自発的に英語を話させるのは至難の業だと思っていたが、コミュニケーションを楽しんでいる姿に、ますますActive Learningを展開していきたいという気持ちが高まっている。

今後の展望

「Language is Culture. Culture is Language.」

「言語とは文化そのもの」という言葉に、文化を伝えることの大切さを知りました。アメリカの民家が祝日でもないのに国旗を掲げるのはなぜか? どういう経緯でそうなったのか?—愛国心?—自分の中にそれはあるか?—と文化を知り、その背景を考えることは、自分自身を知ることにもつながります。授業の中でいかに文化に目を向ける機会をつくり、考えさせられるか、またsharingを通して深めていけるかが、今後の課題。試行錯誤を繰り返して、挑戦し続けていきたいです。

2015年度も中学校は米国・モンタナで、高等学校は英国・ケンブリッジで2週間の研修を行った。

参加者たちは、研修に参加するにあたり、どのような課題を持ち、研修で何を学び、その成果を現在どのように生かしているのか。

帰国後の取り組みをレポートする。

REPORT

高等学校英語教員研修

Teachers are facilitators, managers and windows to the world!

英国
ケンブリッジ大学

千葉県立佐倉高等学校 教諭 尾竹 陽子

課題

「英語を使って“理解させよう”としていたに過ぎなかった」

授業は常にAll Englishを心掛け、Communicativeな活動をさせていたつもりでしたが、いつも何かが足りないと感じていました。そして帰国後、ケンブリッジで学んだ“Teachers are facilitators, managers and windows to the world!”という概念を強く意識し始めた時、私は今まで「英文の内容を英語を使って“理解させよう”としていたに過ぎないことに気が付きました。現在は「生徒が英語を自力で理解し、自分の英語で表現するのを“手助けする”」授業を目指していろいろな工夫を試みています。

帰国後の変化

「6つの変化で生徒自ら英語を使う体験を」

変化1

Warm-up では、ペアの生徒にそれぞれ短い英字新聞(高校生用)の記事を与え、5分間で内容を読み取らせ、英文を見ずにキーワードだけを頼りに1分間で相手に記事の内容を伝える。
⇒旬な英文記事に接する機会を与え、読むことに興味を持たせると同時に、「自分の英語」で伝える力をつける

変化2

教科書の本文を分割して、それぞれ自分が担当する英文に関してキーワードや絵やグラフだけをメモさせ、そのメモだけを頼りにグループ内で担当英文の内容を発表させる(全グループで同じ文を使用しても、全体の内容をグループでまとめて発表も可)。
⇒友達の内容を聞くことで、自分の理解できなかった部分や表現に気付かせる

変化3

英字新聞やインターネットから取った、教科書の内容に関連する別々の英文(同じ英文でも可)を与え、**変化2**の活動をさせる。
⇒教科書の内容をさらに深めることで、関連する新出単語も増え、最後のプレゼンテーションの手助けとなる

変化4

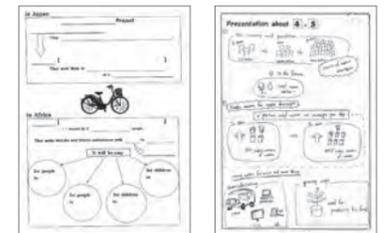
英文で理解できない文や文法事項は、まずグループ内で教え合って解決させ、それでも未解決なものは、分かるグループに解説をさせ、さらに未解決なものは、最後に教師が助ける。
⇒生徒同士が教え合って学ぶ時間を作る

変化5

Lessonを終えた後に、できるだけそのLessonで使った表現や知識を使えるようなテーマでプレゼンテーションをさせ、評価に加える。(例:「宇宙ゴミを撤去する新しい機械を考え、絵や図も用いて説明せよ(グループ発表)」・「水不足に関してあなたが思うこと(個人スピーチ)」など)
⇒教科書から得た知識や単語をフルに活用して活動させる

変化6

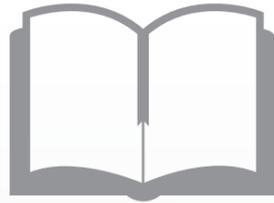
今までバルーンチャートを使っての発表や、内容を図表にまとめて穴埋めする教師作成ワークシート(写真左)に慣れているので、思い切ってワークシートを白紙にしてみた。文章を書いてはいけないことを約束し、キーワード、グラフ、表、絵、数字、バルーンチャートなどはOKとする。生徒は英文を見ないでそのシートだけを使って自分の英語で内容を発表する。私が作るワークシートよりも素敵なものができ上がっているのを見て(写真右)手応えを感じた。また、自力で理解し、自力でまとめたシートなので、グループ内での発表も以前より活発になった。英語が苦手な生徒も、自分なりに理解した内容を絵や図にして一生懸命説明し、言えない表現を他の生徒が助ける場面も多く見られた。
⇒白紙のワークシート導入



今後の展望

「“生徒の頭がフル回転する授業”を目指して」

ケンブリッジ研修は、私にとって「授業改革の起爆剤」になりました。「生徒に～を理解させる」のではなく、「生徒が自分で～する」ための環境をつくるのが私たち教師の仕事なのだと思います。今後も生徒たちの自主性を信じ、「生徒の頭がフル回転する授業」を目指してさらに工夫を重ねたいと思います。帰国後の授業では、私が英語を話している時間が減りました。それでいいのだと思います。なぜなら…**“I am a facilitator and a manager.”**なのでから。



わたしのオススメ本

英語教育に携わる皆さんにオススメの書籍をご紹介します。

今回は、特集記事のご監修および連載記事をご執筆いただいている先生方の著書より、明日からの授業づくりに役立つ書籍をご紹介します。

Present!

本コーナーでご紹介した書籍を読者の皆様へプレゼントいたします。

ご希望の書籍の番号と下記の必要事項をご記入のうえ、FAXまたはEメールにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

- ① 氏名
- ② 所属(勤務校名)・役職
- ③ 連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)
- ④ ご希望の書籍番号
- ⑤ 今号で興味深かった記事とその理由
- ⑥ 今後、本誌で取り上げてほしい内容や意見

抽選で各1名様にご希望の書籍を差し上げます。皆様からのご応募をお待ちしております。

応募締切

2016年6月30日(木)

応募方法



03-5439-6879



eigojoho@morecolor.com

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

1



投野 由紀夫 先生



『発信力をつける新しい英語語彙指導 プロセス可視化とチャック学習』

投野由紀夫(著)
三省堂 定価(本体1,400円+税)
2015年3月1日発行

2020年実施の次期学習指導要領で検討されている、中学校での「授業は英語で行うことを基本とする」を見据えて、コーパス言語学・言語習得論などの最新知見から「真の発信力を培う語彙指導法」を、具体的な実践例を交えて解説します。CEFR-Jを利用しつつ、CAN-DOリストへの評価基準変更にもどのように対応すべきかといったヒントも満載です。また、生徒自身が調べる力を身に付け、自力で英語学習に取り組むための辞書指導にも言及。語彙学習プロセスの可視化とチャックを機軸とし、アウトプットの瞬発力を養うようなインプットの指導例も提案しています。授業改善に役立つ一冊です。

2



和泉 伸一 先生



『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』

和泉伸一(著)
アルク 定価(本体2,700円+税)
2016年4月14日発行予定

文法訳読式の指導とコミュニケーション的な指導の間にある指導法ともいえる「フォーカス・オン・フォーム」に関する理論と実践をまとめた、中学校・高等学校・大学で教鞭を執る指導者向けの一冊。フォーカス・オン・フォームと、内容学習と交えて4技能の育成を目指す教育的なアプローチであるCLIL(内容言語統合型学習)について、授業事例や活動事例を豊富に取り入れて解説しています。授業事例の中には、詳細なティーチャー・トークも含まれており、理論的な解説とともに具体的な授業展開例も紹介する実践的な内容です。主体的な英語学習者を育てる一助としてお役立てください。

3



阿野 幸一 先生



『みんなの楽しい英文法「スタンプ例文」でわかる英語の基本』

阿野幸一(著)
NHK出版 定価(本体1,400円+税)
2014年12月13日発行

英語教育の新しいスタンダードである「CAN-DO」と、コミュニケーションアプリでおなじみの「スタンプ」の特性を組み合わせ、中学英文法の要点・使い方がひと目で分かる「超実践型」の英文法書。英文法項目からではなく、「CAN-DO(何が表現できるか)」から英文法を習得することができるため、英会話などの実践にもすぐに役立ちます。また、スタンプの持つ「文字より早く、楽しく伝わる」特性を応用し、英文法の形、しくみ、使い方をイラストで理解することで、効率的かつ感覚的に英文法の使い方をつかむことができます。コミュニケーションのための文法力=「一生役立つ英語の土台」を作りましょう。

4



大城 賢 先生



『小学校英語教育の展開 よりよい英語活動への提言』

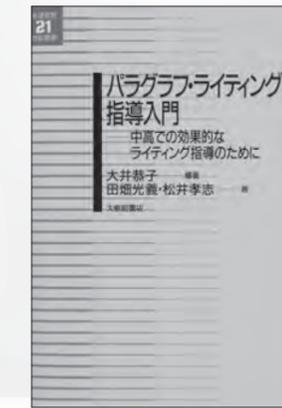
樋口忠彦・大城 賢・國方太司・高橋一幸(編著)
研究社 定価(本体3,200円+税)
2010年6月24日発行

幼児・児童向けの英語教育について理論と方法を検討するため、1980年に創立された、日本を代表する小学校英語教育のプロ集団「日本児童英語教育学会」(JASTEC)のメンバーによる小学校の外国語活動のガイドブック。2011年度から小学校高学年で必修化された週1時間の「外国語活動」について、全国の優れた実践者の授業を紹介しています。教材研究や授業の進め方、文部科学省が作成した外国語活動用の補助教材『英語ノート』(当時。現在は『Hi, friends!』を使用)を使う際の留意点なども具体的に解説。豊富な実績と経験に裏打ちされた、過去と未来を見据えた小学校英語教育の理論と実践の一冊です。

5



大井 恭子 先生



『パラグラフ・ライティング指導入門 中高での効果的なライティング指導のために』

大井恭子(編著) 田畑光義・松井孝志(著)
大修館書店 定価(本体2,000円+税)
2008年8月20日発行

「パラグラフ・ライティングとは何か?」「どのようなステップを踏んで指導していけばよいのか?」といったライティング指導に関する疑問について、中学校や高等学校での指導法を解説し、さらに授業での実践例や典型的な誤答への指導例などを挙げて、英作文の指導法を丁寧に解説します。また、資料編では全国の高等学校入試問題におけるライティング問題の傾向や公立高校の入試問題例と対策、国立大学や私立大学の入試における自由英作文への対策も収録。「パラグラフ・ライティング指導」の導入を考えている方には、まさに最適の入門書ともいえる本です。

6



柴原 智幸 先生



『NHK CD BOOK 攻略! 英語リスニング 徹底シャドウイングでマスター! 長文リスニング vol.2』

柴原智幸・ベンジャミン ウッドワード(著)
NHK出版 定価(本体1,700円+税) CD1枚付き
2015年8月18日発行

口に出来る英語は聞き取れる! 聞こえてくる英語をそのまま口に出すとリスニング力がアップする! シャドウイング(=Shadowing)でトレーニングをすればするほど、長い英文が驚くほど簡単に聞き取れる! NHKラジオ『攻略! 英語リスニング』の単行本「シャドウイング」シリーズ第2弾。歴史、芸術から科学まで、聴いて学べる英文で楽しみながらリスニング力を身に付ける一冊。ディクテーション〜音声変化確認〜シャドウイングの3つのステップで、リスニング力と英文読解力を向上できるトレーニングをしてみましょう。

Cover Photo:

鹿児島県 始良市立帖佐小学校 教諭 畑 康代
長野県 木曾町立開田中学校 教頭 桐井 誠
北海道函館中部高等学校 教諭 大塚 徹
早稲田大学 文学部文化構想学部 教授 安藤 文人

編集後記

2016年度が始まりました。『英語情報』は今号より、小学校から大学までの英語教育の“今”を伝える情報誌として、新創刊いたしました。学習指導要領の改訂や大学入試改革など、2020年に向けて英語教育が大きく変わろうとしているなか、『英語情報』でもできる限り、皆様のお役に立てるような英語教育の動向や最新の情報をお伝えしてまいります。さて、今号では、「CAN-DOリストを活用した学習到達目標の設定と評価」をテーマに特集を組み、その実践事例となる学校を取材しました。取材を通じて先生方からは、「英語科教員同士が意見を出し合い、CAN-DOリストをまとめあげていく過程が重要だった」「自分の指導法を見つめ直すきっかけになった」といった声をいただきました。『英語情報』では今後も、授業改善に役立つテーマを特集してまいります。皆様からのご意見・ご要望をお寄せいただき、充実した誌面を作っていくことができれば幸いです。

『英語情報』編集部一同

英語情報 2016 春号

2016年4月1日発行

発行 公益財団法人 日本英語検定協会
企画広報部 広報課
〒162-8055
東京都新宿区横寺町55

編集統括 株式会社モアカラー
アートディレクション・制作 株式会社モアカラー
印刷 日新印刷株式会社
製本 有限会社穴口製本所

©無断転載、複製を禁じます。
©2016 公益財団法人 日本英語検定協会

英検試験問題と解答のウェブサイト公開のご案内

公益財団法人 日本英語検定協会は、より広範な情報公開と、サービスの質的向上を図るべく、一次試験問題を英検ウェブサイトにて公開するサービスを行っております。一次試験日から約1週間後に問題を提供いたします。英検ウェブサイトのURLは、下記の通りです。

英検試験問題 <http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/>

一次試験の「解答速報」は、毎回一次試験日の翌月曜日13時以降に英検ウェブサイトにて公開いたします。

英検解答速報 <http://www.eiken.or.jp/eiken/result/>

本誌について

お問い合わせ先 英検サービスセンター TEL 03-3266-8311

お問い合わせ電話案内

電話番号はお間違えないようお願いいたします。

- 英検申込受付に関する事
(出願、検定料など) 英検サービスセンター (個人) 03-3266-8311
- 英検受験に関する事
(受験票、会場、合格通知など) 英検サービスセンター (団体) 03-3266-6581
- 英検 Jr.に関する事 英検サービスセンター (英検 Jr.) 03-3266-6463
- 研究助成に関する事 英語教育研究センター 03-3266-6706
- BULATSに関する事 BULATS事務局 03-3266-6366
- IELTSに関する事 IELTS事務局 03-3266-6852
- TEAPに関する事 TEAP運営事務局 03-3266-6556
- 英検留学に関する事 英検留学情報センター 03-3266-6839
- 通信講座に関する事 通信教育課 03-3266-6521
- その他のお問い合わせ 英検サービスセンター 03-3266-8311

※ 全国の英語教育に関する研究会、セミナーなどのウェブへの情報掲載については、英検のウェブサイトのフォームよりお申し込みください。

英検

新学期は「英検」でスタート!

4技能入試にも、海外留学にも、英語力向上にも。

後援：文部科学省

英語担当教員
「英検助成」を利用して
準1級を目指す!

準2級を取得して
あこがれの留学へ!

4技能入試に挑戦して
大学に合格!



2016年度 実用英語技能検定 試験日程

第1回検定	第2回検定	第3回検定
申込受付 3/18(金)~5/20(金) <small>協会必着</small> 【書店締切：5/18(水)】	申込受付 8/1(月)~9/16(金) <small>協会必着</small> 【書店締切：9/14(水)】	申込受付 11/29(火)~12/20(火) <small>協会必着</small> 【書店締切：12/16(金)】
一次試験 (筆記・リスニング) 6/12日	一次試験 (筆記・リスニング) 10/9日	一次試験 (筆記・リスニング) 2017/ 1/22日
準会場 <small>すべての団体</small> 6/11日・12日 <small>中学・高校のみ</small> 6/10日	準会場 <small>すべての団体</small> 10/8日・9日 <small>中学・高校のみ</small> 10/7日	準会場 <small>すべての団体</small> 1/21日・22日 <small>中学・高校のみ</small> 1/20日
二次試験 (面接形式のスピーキング) 7/10日	二次試験 (面接形式のスピーキング) 11/6日	二次試験 (面接形式のスピーキング) 2017/ 2/19日

※ 4級、5級のスピーキングテストについては、受験日を設定していません。4級、5級のスピーキングテストの詳細は、以下をご確認ください。

<http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/4s5s>

